II. 遺跡調査の概要

一色青海遺跡（本発掘調査B）

いっしきあおかい

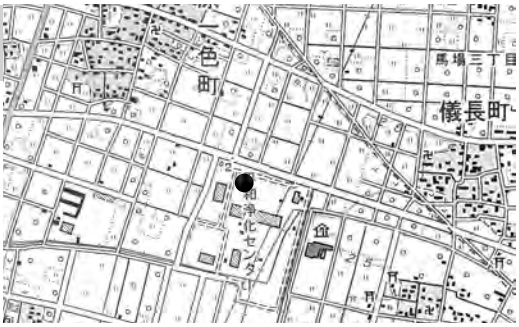
所　在　地　稲沢市一色青海町地内
（北緯35度14分11秒　東経136度45分18秒）

調査理由　日光川上流流域下水道事業

調査期間　令和3年5月～10月

調査面積　1,040㎡

担　当　者　堀木真美子・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査は愛知県建設局下水道課による日光川上流流域下水道事業水処理施設築造工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地である。近代の耕作土、床土を除去した状態を１面目として、鎌倉時代～江戸時代までの遺構を検出し、１面目の遺構除去後に検出される弥生時代中期後半の遺構を２面目として扱っている。調査面積は1,040㎡である。

立地と環境　一色青海遺跡は三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道南岸の自然堤防上に位置する。遺跡周辺の現況は、水田や植木の栽培を目的とする耕作地として整備され、区画整理も進んでいるため、旧地形が窺える場所は無い。現況の遺跡周辺の標高は、わずかに北東から南西側に下る地形となっている。

地下水位は高く、標高0.5m以下では湧水が発生する。遺構検出面は、現代の水田耕作土の掘削深度にも影響されるが、標高0.2m～0.5m付近に位置し、遺構、地山ともに砂質の粘質土によって形成され、滞水によって容易に崩落するため、調査には常時排水設備が必須となる。

調査の概要　過去の調査結果から、一色青海遺跡では北西側を上流として、南東に流下する旧河道と旧河道内を再掘削されて設けられた大溝が2019年度調査区の西半部を通り、2009年度調査区内で東向きとなった後に北東に向きを転じ、2018年度調査区中央を北に抜ける状況が検出されている。今年度の調査区は2019年度調査区の西隣、2009年度調査区の北西側に位置することから、旧河道(400NR)と、大溝(200SD・600SD)は、2019年度調査区から連続し、当調査区の北西角付近から東へ抜け、当調査区の南西付近には、旧河道、大溝の南岸に位置する居住域がわずかにかかることが想定されていた。

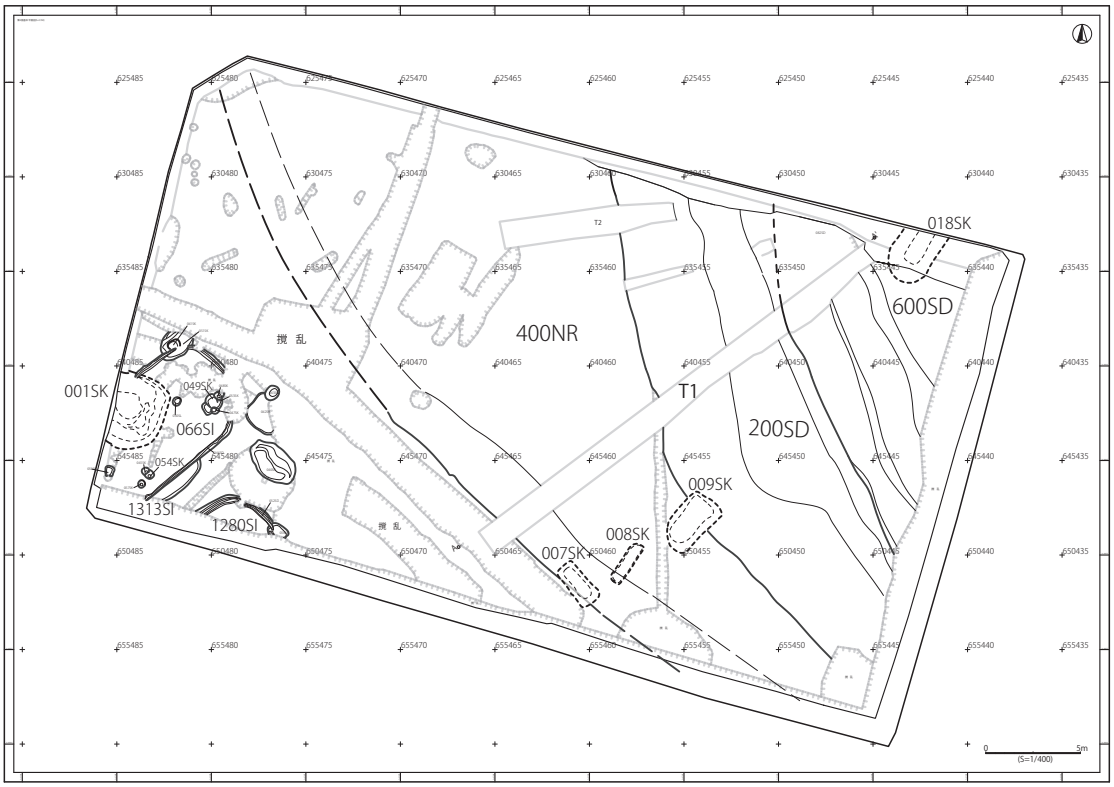
1面の遺構(中近世)　調査の結果、１面目では、過去の調査同様、鎌倉時代～近代の遺構が検出された。主な遺構は平面形が方形・楕円形の土坑、溝がある。平面形が方形の土坑(007SK・008SK・009SK)は、過去の調査でも多数検出され、埋土は粘質土がブロック状に混じる土、山茶碗などが検出されるという共通点がある。これらは鎌倉時代前後に掘削されたと考えられている。平面形が楕円でやや深い土坑(001SK・018SK)は、埋土が方形のものとは異なり、粘土か粘土に砂が混入した状態となっている。施釉陶器が検出されたことから、近世に掘削され、埋没したと考えられる。過去の調査でも検出されているが、検出される数は方形の土坑より少なく、用途として耕作地内の水溜めなどを推定している。溝(2面目遺構平面図では撹乱として表記)は現在の水田と方位が一致しないものは、周辺の耕作地が区画整理される以前のものと考えられ、時期は近現代を想定する。

2面の遺構(弥生時代中期)　弥生時代中期の遺構は、旧河道(400NR)、大溝(200SD・600SD)、竪穴建物跡(066SI・

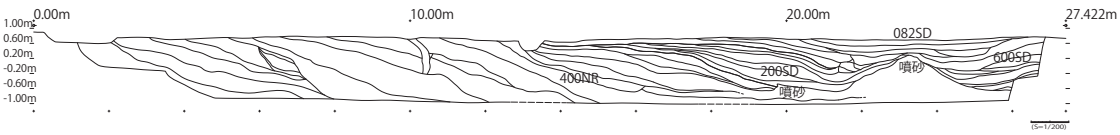
1280SI・1313SI)がある。旧河道と大溝は当初の想定よりも東寄りに検出され、上流部が当調査区のより北側から流下することが判明した。また、居住域が想定された調査区南西角部では、合計３棟の竪穴建物跡が検出された。内訳は、新たな竪穴建物跡１棟(066SI)、2009年度の調査区から連続する竪穴建物跡2棟(1280SI・1313SI)である。これら３棟の前後関係は検出状況より066SIが最新であり、1313SIが切られている。なお、2009年度の調査では、066SIの位置に想定された1660SIがもっとも古いと考えられたが、今回の検出結果は異なっているため、新たに別の遺構番号(066SI)を付した。

066SIは長辺8.5m以上、短辺5.7mを測る。特に遺構内の北半部には炭化物・炭化材が多く残存し、炭化材が一定の方向に揃う状況も見られるため、これらは066SIに用いられていた建築部材の一部と考えられる。066SIの柱穴は、東側の049SK、054SKが検出されたが、西側では明確な柱穴が検出できなかった。

ま と め　遺物は066SI内で土器がまとまって検出された。旧河道(400NR)、大溝(200SD・600SD)からも検出はされるものの、過去の調査に比べると量が少ない。これは一色青海遺跡の集落域中心部が当調査区よりも下流域にあるため、河道・大溝に廃棄、あるいは流れ込んだ遺物は下流に流れ、上流方向には少ないためと考えられる。　(鈴木恵介)



2021年度調査遺構配置図(一部1・2面の遺構を合成)



T1土層断面(200SDと600SDの境界付近が噴砂で歪んでいる)

一色青海遺跡 遠景(西から)

調査区 全景(西から)

楕円形の土坑断面(018SK：南西から)

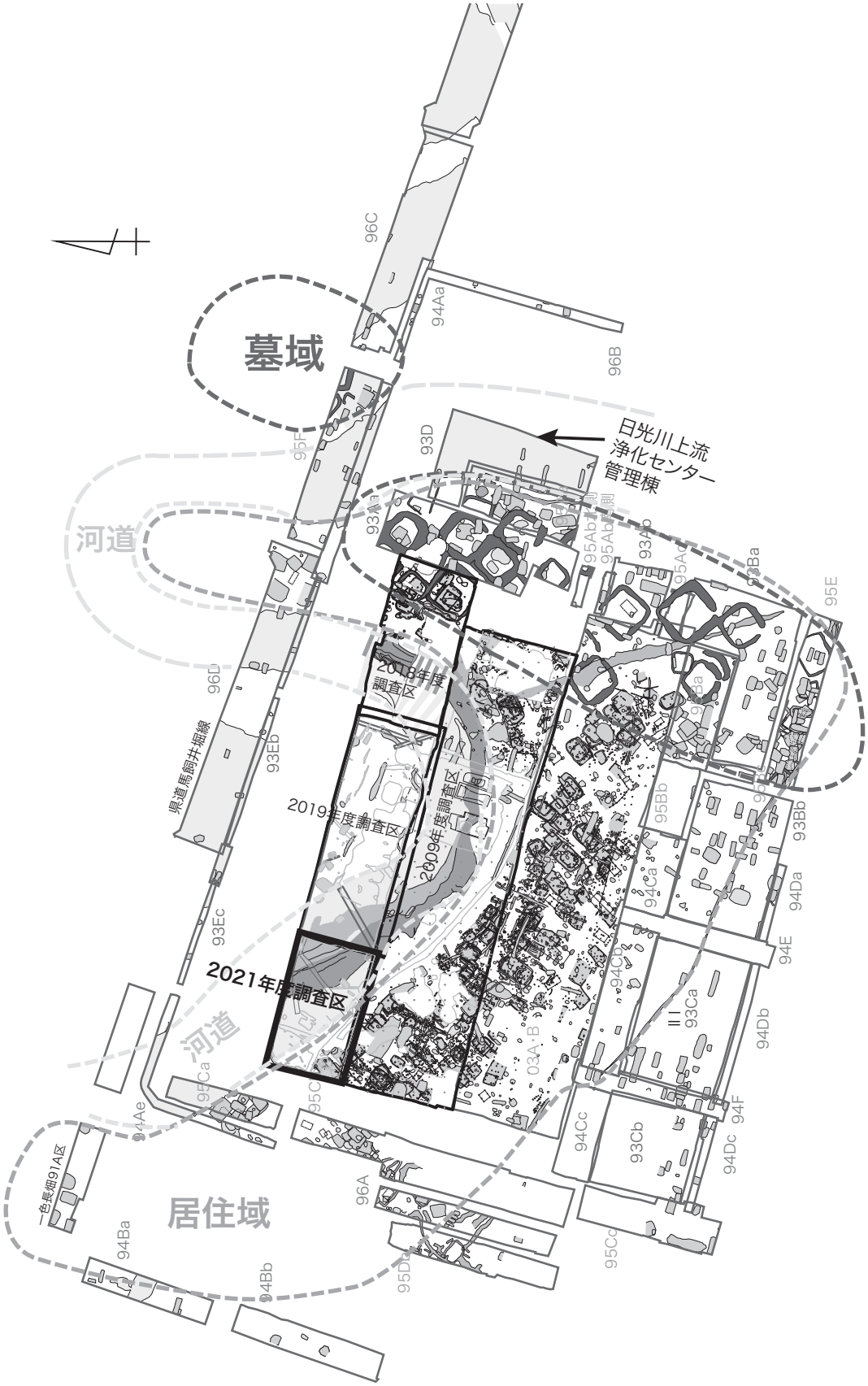
竪穴建物跡(1280SI：東から)

竪穴建物跡(右から066SI、1313SI、1280SI：北上空から)

竪穴建物跡(066SI)出土遺物(南から)

大溝の完掘状況(手前の列左が200SD南岸、右は北岸)

T1土層断面



集落模式図(弥生時代中期後葉・S=1/2000)

清洲城下町遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　清須市一場・朝日城屋敷地内
(北緯35度13分07秒　東経136度50分39秒)

調査理由　橋梁整備工事総合治水対策特定河川工事

調査期間　令和3年12月～令和4年3月

調査面積　650㎡

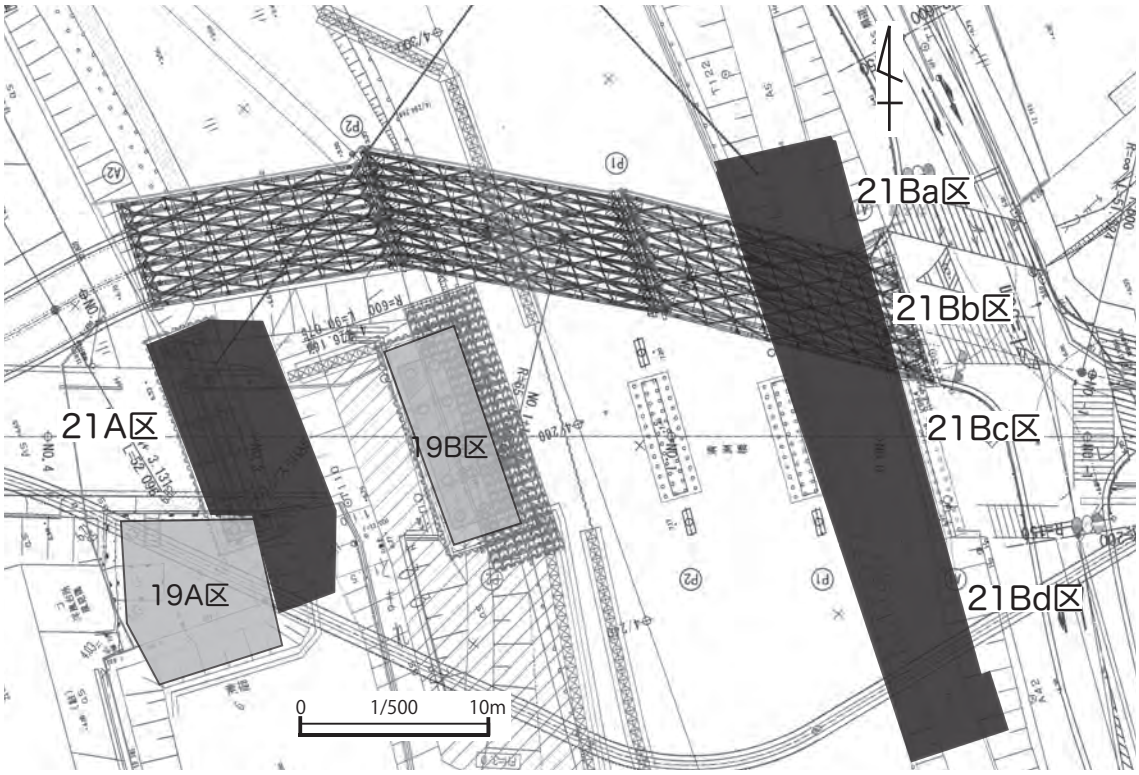
担　当　者　堀木真美子・蔭山誠一

調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課による橋梁整備工事総合治水対策特定河川工事(主)名古屋祖父江線に関わる清洲橋施工事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査区は五条川両岸の河川敷で清洲橋の南北にある。調査面積は650㎡で、五条川右岸にある21A区、五条川左岸で、北から21Ba区～21Bd区として調査した。

立地と環境　清洲城下町遺跡は五条川中流域に形成された自然堤防と後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の中央には、名古屋方面の南南東から北北西にのびる美濃街道がはしっており、美濃街道と五条川が交差する北側に清須城の本丸が想定されている。

調査の概要　今回の調査では、古代の自然流路1条(004NR)と戦国時代の溝4条を確認できた。調査を実施した21B区は五条川左岸の中堀の内側にあたる地点で、主に城下町後期の武家屋敷地などを構成する区画の一部かと思われる。　(蔭山誠一)



調査区配置図(S=1/500)

調査区(Ba区) 遠景(北から)

Ba区全 景(南東から)

Bb区 全景(北から)

Bc区 全景(北から)

Bc区 020SD・021SD(北東から)

南山町遺跡（本発掘調査B）

みなみやまちょう

所　在　地　江南市南山町東地内
（北緯35度18分51秒　東経136度52分50秒）

調査理由　一般国道155号道路改良工事

調査期間　令和3年12月～令和4年3月

調査面積　700㎡

担　当　者　堀木真美子・武部真木

調査地点（1/2.5万「小牧」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課による一般国道155号道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査対象地は現道南側の拡張部分であり、昨年度調査区西側のAa・Ab区、同東側のB区について、計700㎡の調査を行った。

立地と環境　遺跡の所在する江南市は、尾張北部の犬山扇状地の扇央部に立地する。調査遺跡は市域の南東部にあたり、隣接する大口町との境界に近い五条川右岸の標高約16mの自然堤防上に立地する。周辺一帯には多数の古墳が分布し、調査地点のすぐ北側には『尾張名所図会』にも記載のある富士塚古墳、南東方向約1.0kmには全長約60mの規模をもつ6世紀の前方後円墳、曽本二子山古墳などがみられる。五条川対岸には飛鳥～奈良時代の集落跡である白木遺跡が位置する。

調査の概要　調査範囲は、現在南流する五条川右岸域の自然堤防および後背湿地の地形を横断する形となる。西端のA区は犬山と岩倉方面を結ぶ柳街道（岩倉街道）に近接すると考えられ、また東端のB区は旧五条川に続く谷地形が想定された。両者の間の昨年度調査区は遺構・遺物ともに希薄ではあったが、古墳時代の溝、奈良時代の溝・土坑、平安時代の土坑、鎌倉・室町時代、江戸時代の遺物が出土している。

A区では国道整備に伴う整地層等を除去すると、攪拌された層厚20cm前後の褐色シルト質砂層がみられ、これには炭化物、土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗の細片が多数混じる。その下には暗褐色砂質土に基盤層が混じる堆積層が5～40cm、西側に厚く東側は調査区南壁付近にのみ認められる。旧地形の起伏に関連すると思われるが、現況からはほぼ推定できない。この暗褐色土下位から基盤層上端で遺構検出を行なった。

主な遺構には、古墳時代の須恵器を含む土坑、古代の竪穴建物1棟、中世の区画溝、時期の不確定な土坑・ピットがある。Aa区東部の南壁際の不定形の凹み(036SK)には須恵器高坏、無台坏、土師器が含まれる。凹みの下層(079SK)には土器等はないものの大型の河原石2点が含まれ、さらに下に続く円形土坑(087SK)も壁面で検出した。溝(020・026・029SD)は検出長17.4m、南西から北東方向にほぼ直線状に延び、幅約90cm、深さ32cmである。また、建物の復元はできなかったが、この溝に先行して上端で径60～80cmの掘方、深さ50～80cmのピット(045・023・050SK)がある。出土遺物の須恵器高杯は灰白色を呈し美濃須衛窯製品の可能性がある。溝の埋土上層で13世紀半ばを中心とした山茶碗（尾張型、東濃型）、片口鉢がややまとまって出土している。

ま　と　め　調査終盤にAb区にて竪穴建物が検出され、周辺に古代の集落の広がりが推定できるようになった。市域の遺跡調査は少なく、貴重な事例である。（武部真木）

遺跡遠景と柳街道(南から)

Aa区 全景(写真上が北)

Aa区 南壁東端付近(北西から)

Aa区 023SK(西から)

Aa区 南壁東端付近 須恵器出土状況(北東から)

Aa区 042SK須恵器出土状況(南西から)

Aa区 020SD(西から)

Aa区 020SD片口鉢出土状況(北から)

断夫山古墳（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「名古屋南部」）

所　在　地　名古屋市熱田区旗屋二丁目
（北緯35度07分52秒　東経136度54分14秒）

調査理由　史跡断夫山古墳調査事業

調査期間　令和3年11月～12月

調査面積　100㎡

担　当　者　堀木真美子・早野浩二

調査の経過　発掘調査は愛知県県民文化局による史跡断夫山古墳調査事業に伴う学術調査で、愛知県県民文化局を通じた委託事業として、昨年度から継続して実施している。今年度は墳丘主軸の延長線上付近に、後円部の墳端、周濠の規模、周堤の有無の確認を目的とした調査区、後円部背後の周濠、周堤(とその外側の周濠)の有無の確認を目的とした調査区を設定した。

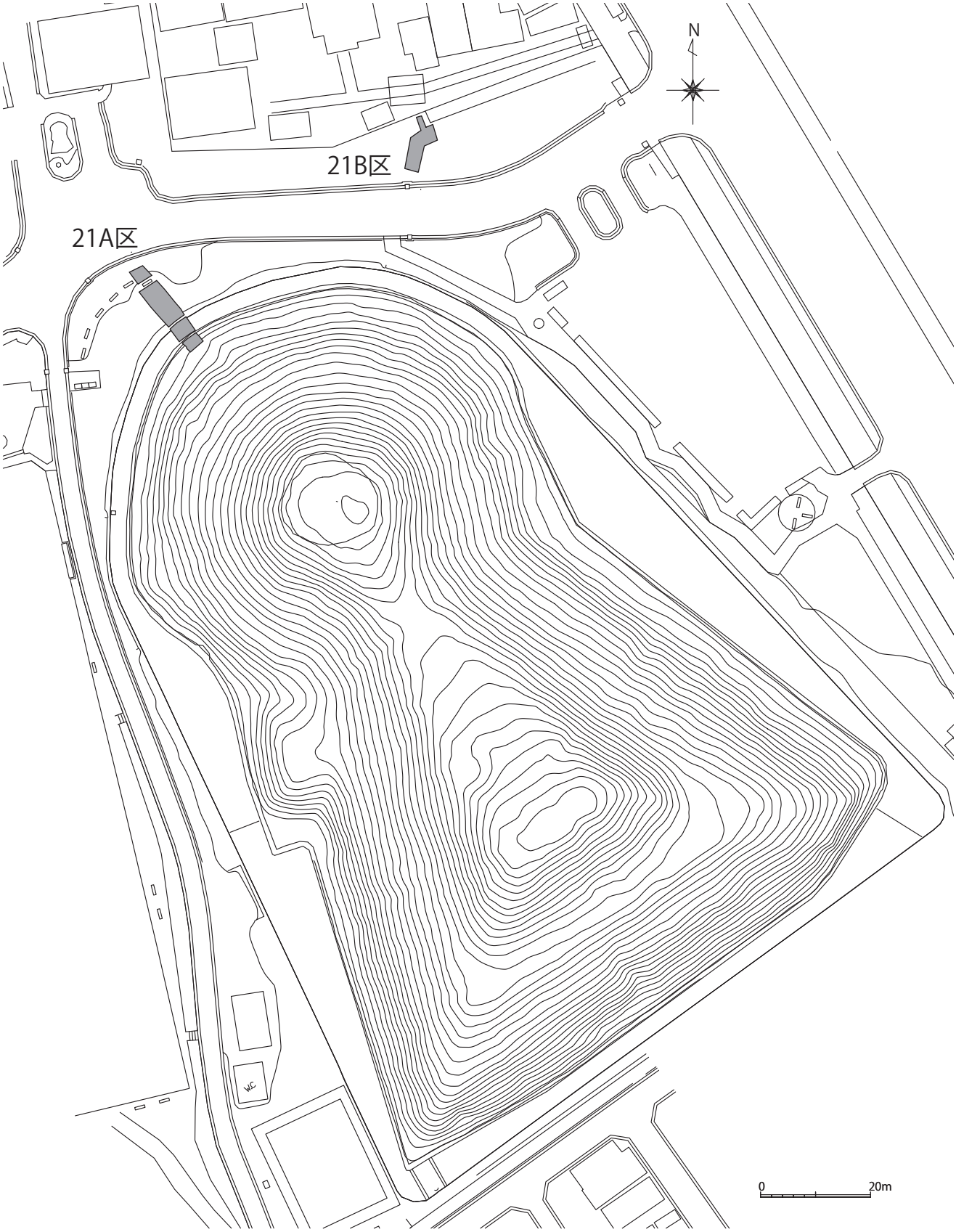
立地と環境　史跡断夫山古墳は岬状に突出する洪積台地(熱田台地)の南端西縁辺に立地する全長150mの大型の前方後円墳である。築造時期は墳形、過去に採集された埴輪と須恵器から古墳時代後期前半と推定されている。埋葬施設の構造は不明である。

古墳の周辺には縄文時代の遺跡として玉ノ井遺跡、弥生時代の遺跡として高蔵遺跡、古墳時代後期の古墳として全長約70mの前方後円墳である白鳥古墳、古墳時代中期から後期を中心とする古墳群として高蔵古墳群が分布する。

２１Ａ区　21A区は史跡指定範囲である後円部最下段の墳丘部分と墳丘を囲う玉石垣間から指定範囲外の部分にかけて設定した。墳丘部分は後円部最下段の斜面から墳端に相当することが想定されていたが、後円部最下段の斜面は墳丘の流出、崩落が著しく、墳端が想定される付近も後世の埋設物の設置等で大きく削り込まれていた。基盤層直上の崩落土からは五輪塔、土師器皿等、中世以降の遺物が出土した。崩落土上にも近現代の遺物を大量に含む客土が厚く盛られていた。客土中からは若干の円筒埴輪、形象埴輪も出土した。玉石垣間は玉石垣の設置によって深く掘削されていた。なお、これらの部分で、(転落した状態のものを含めて)葺石は確認されなかった。指定範囲外の部分は周濠、周堤に相当することが想定された部分で、濠状に深く落ち込む状況を確認したが、中世以降に掘削、排土、整地が繰り返されたようで、落ち込みの下層からは若干の円筒埴輪に混じって中世の遺物も出土した。その上位には近世から近現代の整地層が厚く堆積していた。

２１Ｂ区　21B区は公園の園路外、寿琳寺境内に近接する地点に設定した。調査区の南西(園路)側は生活関連の構造物等の設置によって、遺構面はほとんど遺存していなかった。北東(境内)側は表土直下に基盤層が露出し、古墳に向かって緩やかに傾斜する斜面を確認した。付近からは少量の円筒埴輪が出土したことから、緩斜面は周濠の外側の斜面に相当する可能性がある。なお、調査区内には近世の土坑が散在する。

ま　と　め　発掘調査の結果、21A区では墳丘や外部施設に関係する明確な情報は得られなかった。今後、葺石の有無の確認が必要である。その反面、古墳とその周囲には中世以降の営為が加わっていることが判明した。21B区ではわずかながら周濠の可能性がある部分を確認した。今後、周濠の位置、形状を確定するための調査が必要である。　(早野浩二)



調査区配置図

A区(後円部)

A区 調査着手前

A区 後円部最下段土層断面

A区 玉石垣間掘削状況

A区 掘削状況(周濠状の落ち込み)

A区 中央土層断面(周濠状の落ち込み)

B区(寿琳寺境内前)

B区(周濠外側の斜面)

名城公園遺跡（本発掘調査B）

めいじょうこうえん

所　在　地　名古屋市北区名城一丁目
(北緯35度11分24秒　東経136度54分09秒)

調査理由　愛知県新体育館

調査期間　令和4年2月～6月

調査面積　27,000㎡

担　当　者　鈴木正貴・樋上 昇・永井邦仁・早野浩二・宮腰健司・鈴木恵介

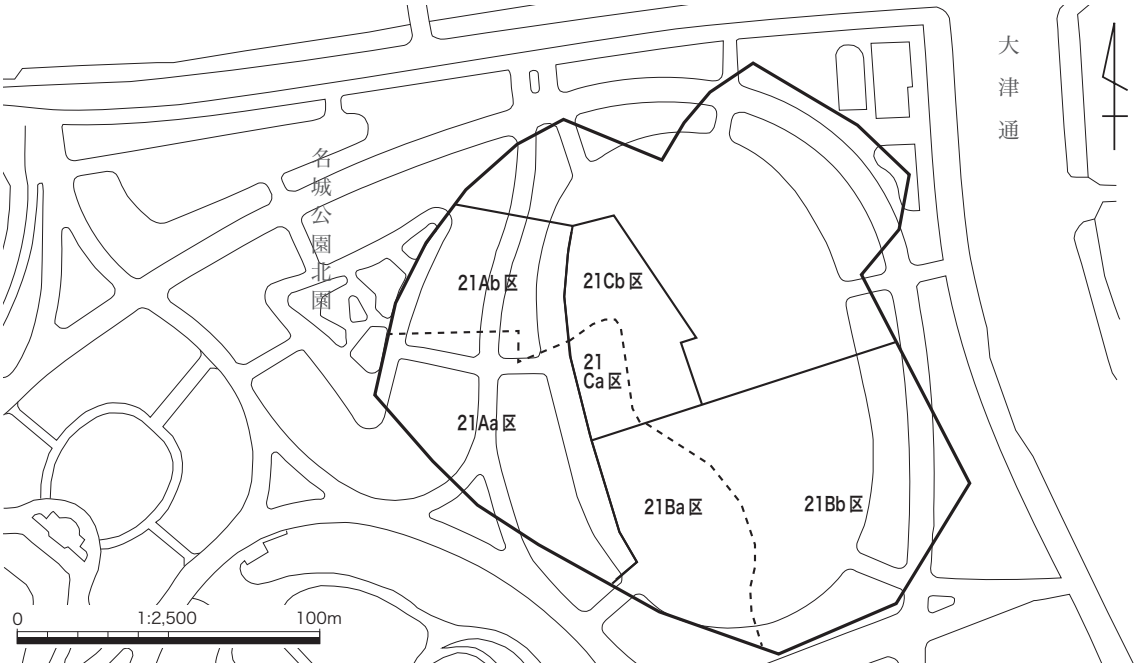
調査地点（1/2.5万「名古屋北部」）

調査の経過　調査は、愛知県スポーツ局による愛知県新体育館工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。令和3～4年度の総事業面積27,000㎡のうち、今年度は21Aa・Ab・Ba・Bb・Ca・Cb区について調査を行った。

立地と環境　遺跡は特別史跡名古屋城の北側に位置し、熱田台地から約10m下った沖積低地に立地する。標高は4.5～5.5mである。江戸時代の当該場所は、「御蓮池」とその北側に尾張徳川家の庭園である下御深井御庭が広がっていた。明治22（1889）年からは陸軍の名古屋城北練兵場、戦後は名城公園となっている。

調査の概要　調査対象地の西縁付近では、近代以降に撹乱された層位から近世後半以降の陶器や瓦の出土し、第10代尾張藩主の徳川斉朝によって改作された頃のものと思われる。その下層には、古墳時代中～後期を中心とする土器類、特に5世紀末～6世紀前葉の須恵器や土師器を包含する暗褐色シルト層が広がっている。土器の集中するポイントがいくつかあり、多量の炭化物を伴う箇所もあることから、当該期の集落があったものと考えられる。遺物包含層の下位は微高地を形成する明灰色砂質シルトで、21Aa区～21Ba区が最も高くなると見られる。

（永井邦仁）



名城公園遺跡 全体図（S=1/2,500）

下品野（しもしなの）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　瀬戸市品野町5丁目地内
(北緯35度14分56秒　東経137度07分30秒)

調査理由　主要地方道瀬戸環状線改良工事

調査期間　令和3年5月～9月

調査面積　740㎡

担　当　者　堀木真美子・蔭山誠一

調査地点（1/2.5万「猿投山」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局尾張建設事務所道路整備課による主要地方道瀬戸環状線交差点改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査区は国道248号と県道22号瀬戸環状線が交差する品野町6丁目交差点の東側にある。調査面積は740㎡で、品野町6丁目交差点の北東にある21A区・21B区、南西にある21C区～21G区に分けて調査した。また、21C区と21E区は21Ca区・21Cb区、21Ea区・21Eb区と南北に細分して調査を実施した。

立地と環境　下品野遺跡は瀬戸市北東部にある品野盆地の南東緩斜面にあり、北東から流れる水野川と南東から流れる鳥原川が合流する地点の南にある。遺跡の南東には、名古屋方面の南西から長野方面の北西にのびる中馬街道がはしっており、遺跡周辺は古代末から現代にかけての陶器・磁器を生産する窯が数多く営まれた地域である。

調査の概要　今回の調査では、飛鳥時代～奈良時代と平安時代～鎌倉時代、戦国時代、江戸時代後期～近代の主に4時期の遺構と出土遺物が確認できた。

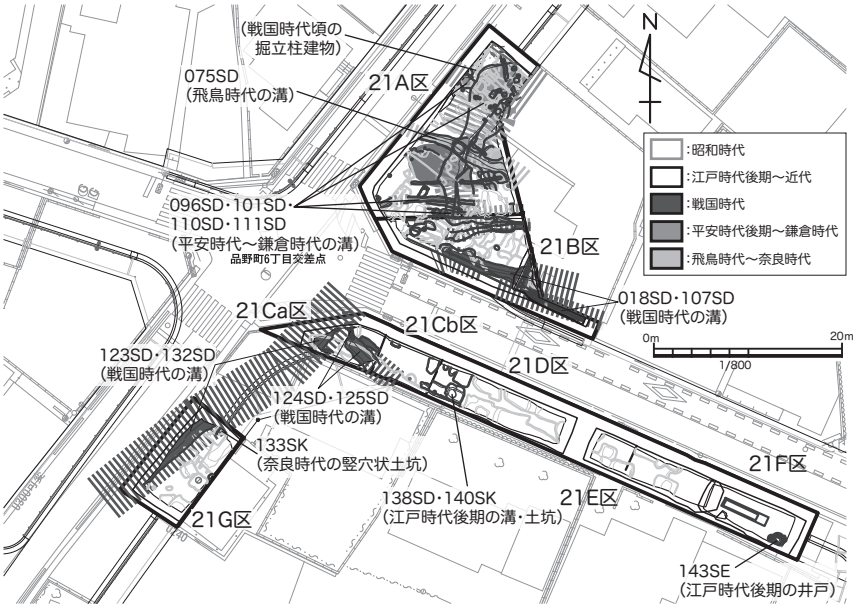
飛鳥時代～奈良時代　溝(SD)1条、竪穴状土坑(SK)1基、土坑(SK)4基を確認することができた。21A区075SDは地形の傾斜に直行する東西方向に流れており、075SDが埋まった後に087SK・089SK・112SKが形成された。交差点南側の21G区においても、竪穴建物跡の可能性のある竪穴状土坑133SKが見つかり、集落が交差点の周囲に広がっていたものと思われる。出土遺物には須恵器、土師器甕、製塩土器などがある。

平安時代～鎌倉時代　溝(SD)7条、土坑(SK)2基を確認することができた。溝は飛鳥時代～奈良時代の溝と同様の東西方向に検出されたが、21A区・21B区で確認できた020SD・111SDは南北20m程の区画を囲む西側部分にあたり、110SDは南北20m 程の区画を囲む東側部分にあたる。周囲に溝に囲まれた屋敷地などの区画が展開していたものと思われる。出土遺物には灰釉陶器、山茶碗などがある。

戦国時代　溝(SD)6条、掘立柱建物1棟、土坑(SK)2基を確認することができた。21B区018SDと21Ca区123SDは、幅が2mを超える断面「V」字型をしており、屋敷地を囲む溝と考えられる。またこれら溝の南東側にも21B区107SDや21Ca区124SD・125SDが並行して検出され、区画の変遷や屋敷の内側を区画する溝になるものと考えられる。またA区北側に掘立柱建物が確認でき、居住域が北側にも展開する可能性が高い。出土遺物には天目茶碗、皿、擂鉢などがある。

江戸時代後期～近代　井戸(SE)1基、溝(SD)1条、土坑(SK)4基、家の基礎と思われる石列(SD)2条を確認することができた。21F区143SEは中馬街道から7m程西に位置しており、街道に隣接する町屋に伴うものと考えられる。出土遺物には多様な椀、皿、徳利、擂鉢、焙烙鍋などがある。

ま と め　今回の調査により、下品野遺跡が古代から近世にかけての複合遺跡であることが確認できた。各時代の遺構の広がりやその性格などの究明は今後の調査によるが、戦国時代の断面「V」字型の溝は、防御性を意識した形状を持つものと考えられる。　(蔭山誠一)

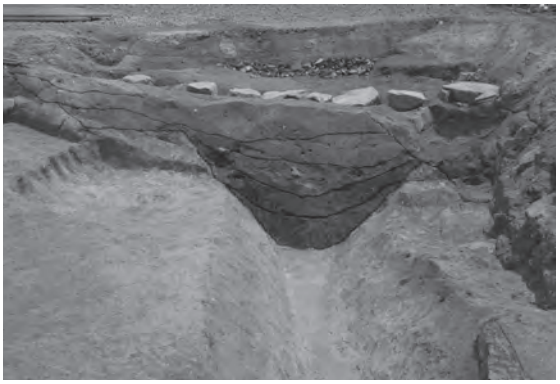


遺構平面図(1/800)

A区 全景(北から)

A区 075SD遺物出土状況(東から)

A区 096SD・101SD・110SD・111SD(南東から)



B区 018SD(西から)

姫下（ひめした）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　安城市姫小川町地内
（北緯34度54分45秒　東経137度05分47秒）

調査理由　緊急防災対策河川事業（一級河川鹿乗川）

調査期間　令和3年6月～9月

調査面積　620㎡

担　当　者　堀木真美子・武部真木

調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局河川課知立建設事務所による緊急防災対策河川事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。鹿乗川および同排水路左岸で新たに事業用地となった１区画について、620㎡の調査を行った。

立地と環境　遺跡は、安城市東部に位置し、碧海台地に沿って流れる鹿乗川東岸の標高７m前後の沖積地上に立地する集落遺跡である。西岸の台地上には桜井古墳群が分布し、最大規模の姫小川古墳をはじめ、崖古墳・姫塚古墳・獅子塚古墳が遺跡に近接して並んでいる。

遺跡自体の調査は昭和48年の安城市教育委員会の発掘に始まり、これまでの調査成果は弥生時代・古墳時代初期～前期・古墳時代後期・平安時代～室町時代・江戸時代後期～明治の５期の変遷として整理され、集落の中心的な活動時期となる古墳時代前期の出土遺物には、人面文土器を含む線刻土器や布留系土器群のほか、農具や工具、祭祀具、大型建築材を含む大量の木製遺物が知られている。

調査の概要　調査地点は姫下遺跡の南端付近にあたり、北側は姫下遺跡14区、現道を挟んだ南側は寄島遺跡14E区であり、両調査区に挟まれた範囲である。今回の調査地点では一部で古墳時代前期の包含層が確認でき、また中世から近世の構築と推定される井戸状の土坑、流路などが検出されたほか、土師器、中・近世の陶磁器類が出土した。

古墳時代前期の包含層は調査区南西部で検出されたもので、標高は約7.0m、流路(002NR・039NR)による削平を免れた8.0×2.5mと7.0×1.2mほどの範囲である。厚さ20cm程度の暗褐色土層は多数の土器片が含まれるが、上端では不明瞭であったため、基盤層上面を遺構検出面として土坑、ピットなど多数を確認した。プランの大部分が調査区外となるが、壁面の土層観察により022SI、034SIは隅丸方形の竪穴建物の一部と想定され、埋土下層には炭化物層が認められる。土坑004SKは検出面で径約1.0m、深さ19cmの皿状の凹みであり、松河戸I式段階の土師器高坏、壺または甕、小型壺が含まれる。

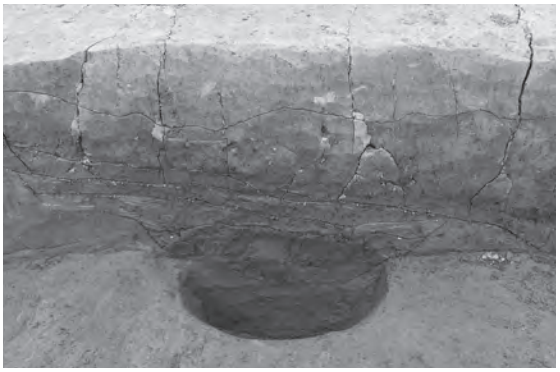
西から東へと流れる039NRは検出面で幅約7.0m、深さは1.0mであり、東側は南北方向の002NRに削られて不明である。遺物は検出されなかった。002NRは南北の既調査地点から続く流路跡であり、攪拌された埋土中には中世・近世の陶磁器片が混じり、古墳時代包含層と同様な暗褐色粘土質土がブロック状となって含まれる。

ま　と　め　今回の調査地点まで古墳時代前期を中心とした集落の広がりが確認された。また1930年代の『碧海郡桜井村土地宝典』では、この辺りに東西方向の用水路が記されており、字界付近で検出された東西方向の039NRがこれに関連すると考えられる。　(武部真木)

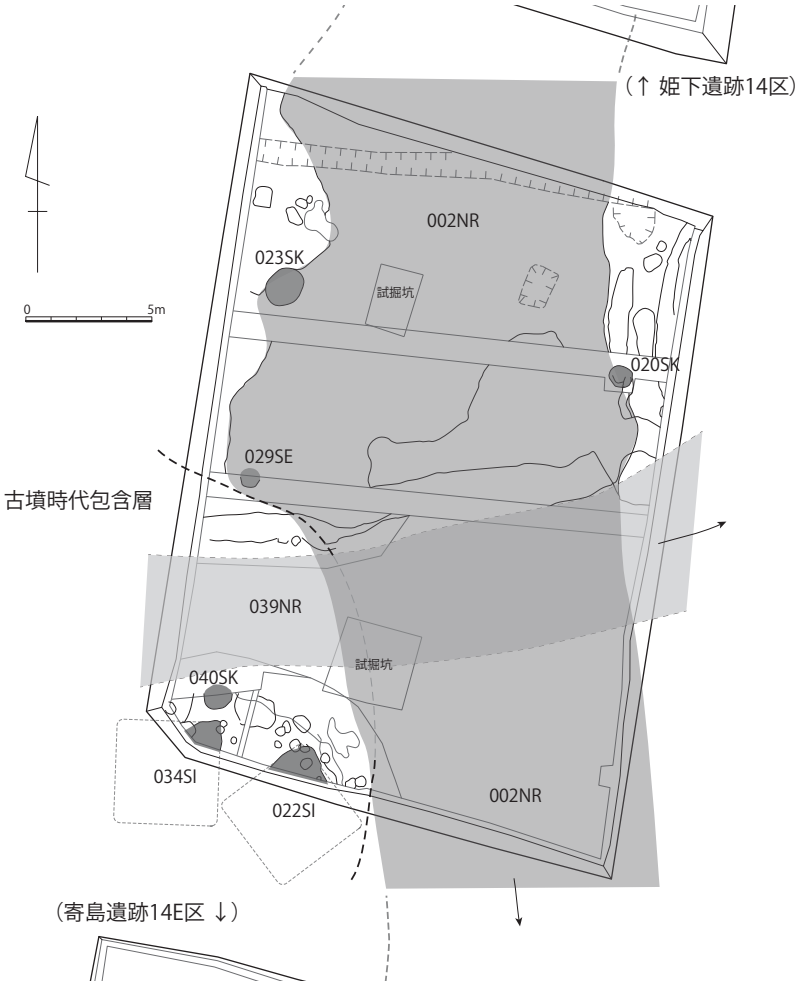
調査区 遠景(南東から)

004SK 土器出土状況

032SI(西から)



029SE(上部は002NRに削られている)



調査区主要遺構配置図(S=1/300)

牛寺（ごでら）遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「豊田南」）

所在地　豊田市野見町一丁目地内
（北緯35度04分23秒　東経137度10分23秒）

調査理由　矢作川河川改修(河道掘削)

調査期間　令和3年10月～令和4年2月

調査面積　2,800㎡

担当者　堀木真美子・永井宏幸・池本正明

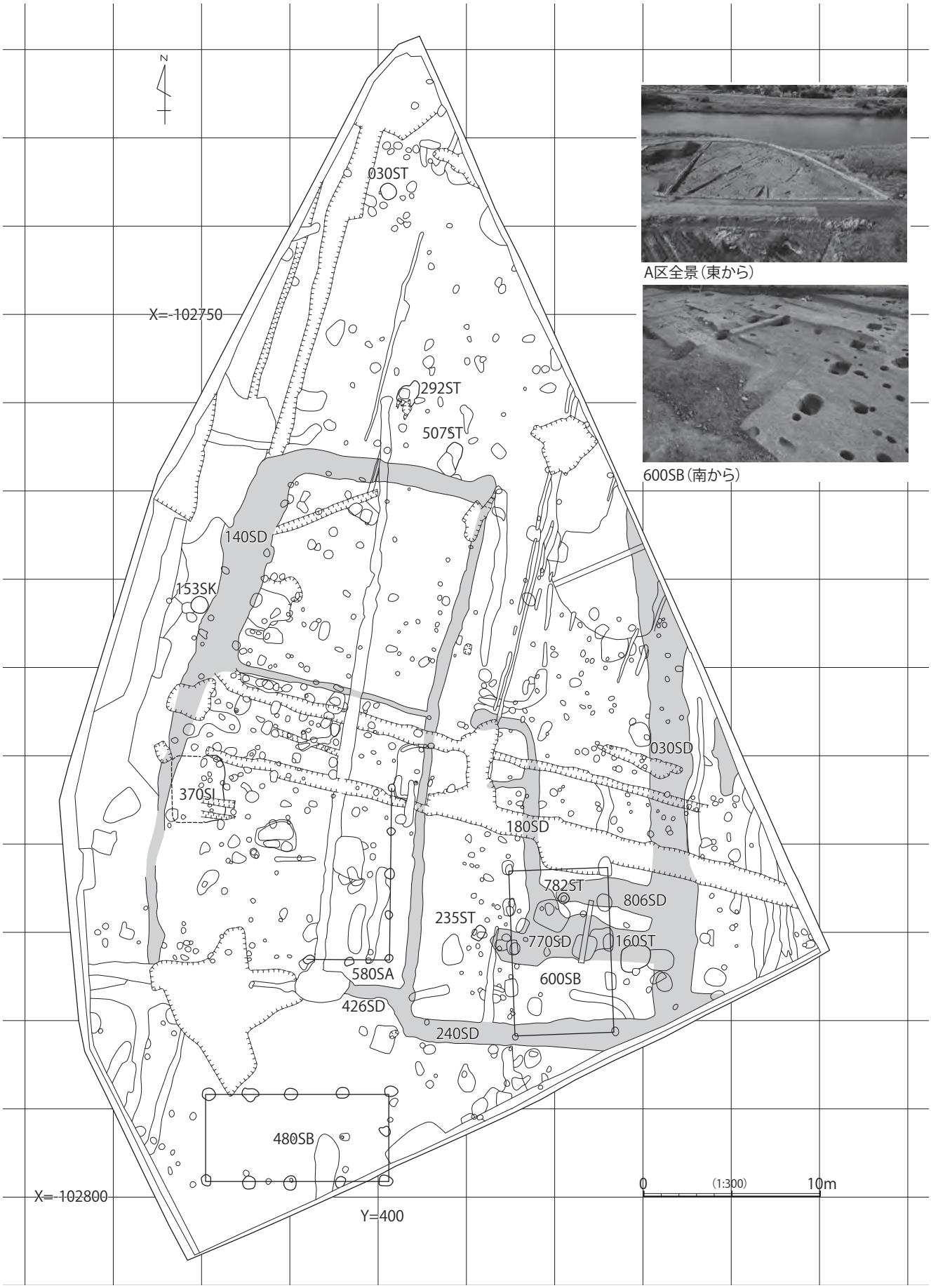
調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所による矢作川河川改修に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。今回の調査区は遺跡の西側部分に該当し、標高は約38m。調査面積は2,800㎡である。

立地と環境　遺跡は矢作川左岸の段丘低位面に位置する。西側には矢作川が流れ、東側は小河川により開析されている関係から、幅約200m、長さ約700m程度の南側に伸びる半島状の地形となっており、遺跡は基部の西側に位置している。

牛寺遺跡の発掘調査は今回で4回目となる。最初の調査は1991（平成3）年で、豊田市教育委員会により実施され、中世の柵列・溝などが確認されている。続く2005(平成17)年と2018(平成30)年の調査は本センターにより実施されたもので、前者は縄文時代中期の土器敷炉や弥生時代後期の竪穴建物、中世の土坑・溝などが確認され、後者は古代・中世の土坑・溝などが検出されている。

調査の概要　ここではA区(1,700㎡)の成果を概観する。縄文時代晩期の土坑(153SK)や、弥生時代後期の竪穴建物(370SB)なども検出されているが、概ね15・16世紀に重心を持つ中世の遺構が中心となる。調査区を見渡すと、全域に溝が展開する事が確認でき、特に140SD・426SDによる東西15m、南北30mの区画が注目される。南東隅には柵列(580SA)も検出されている。内側には直径30㎝前後の土坑が多数存在し、掘立柱建物が存在した可能性も考えられる。この区画の南と東側には、主軸が直交するやや大型の掘立柱建物が２棟(480SB・600SB)も検出されている。次に、調査区の北側と東側では、火葬施設とこれに関連する遺構が点在している。遺構の平面形や埋土の様相は様々だが、床面が被熱し埋土に焼骨を多量に含む782ST、床面の被熱は観察できないが、埋土に焼土塊・炭化材・焼骨の小片を含む292STなどが特徴的となる。

ま と め　主要遺構の変遷を考えると、今回検出された遺構は、大まかに三つのグループに大別できる。まず大型建物だが主軸が直交し、両者は有機的関連性を想定でき、600SBの柱穴が240SD・770SD・806SDなどに覆われている。次に区画溝は、溝の接続部分で切り合いが観察できないため、少なくとも埋没はほぼ同時期と考えられる。次に、火葬施設とこれに関連する遺構は、性格上ほぼ同一時期に収まるものと仮定した場合、160STが770SD、782STが806SDの上面から確認できるため、溝による区画の終焉後にこれらが稼働したものと考えられる。現状では出土遺物の十分な検討を加えていないが、溝による区画が15世紀頃、大型掘立柱建物がこれに先行し、火葬施設とこれに関連する遺構は、溝により区画される遺構群の終焉後の16世紀頃と想定できる。（池本正明）



A区全景（東から）

600SB（南から）

主要遺構図（S=1/300）

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分51秒 東経137度34分05秒）

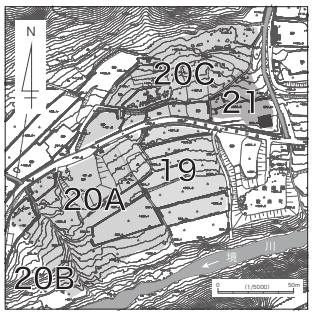
調査理由　設楽ダム

調査期間　令和3年5月～7月

調査面積　1,020㎡

担当者　樋上 昇・川添和暁・酒井俊彦

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査区は、県道432号小松田口線の北側、昨年度調査区20C区に接して遺跡範囲の東端に1,020㎡で設定された。



調査区位置図

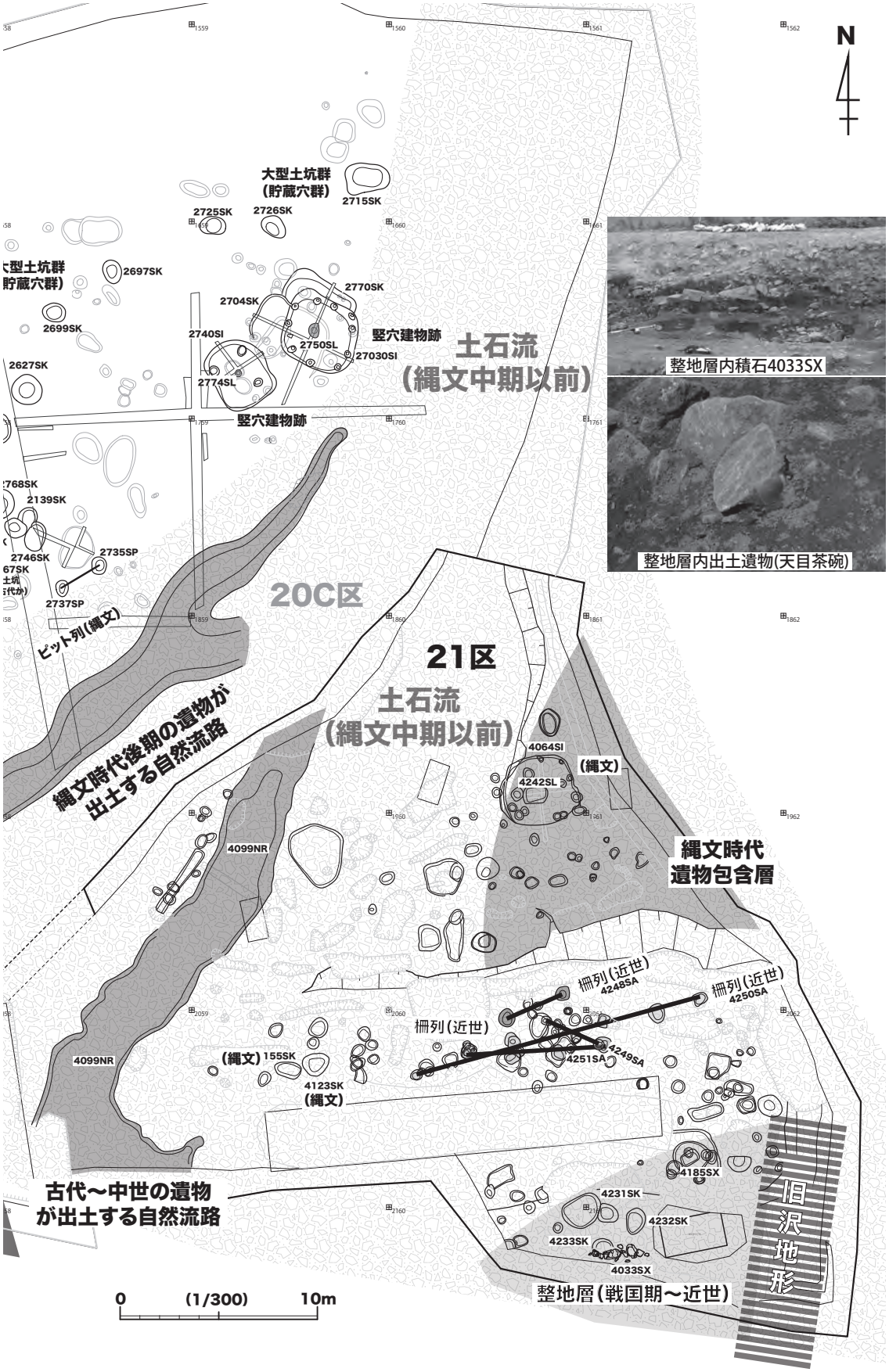
立地と環境　遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地する。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んで来ており、緩斜面は度重なる扇状地堆積(土石流堆積)の累積によって形成されている。今年度調査区の調査前の標高は、400～410mを測る。

調査の概要　基本層序は、上から、第1層：表土および近代以降の盛土・耕作土、第２層：古代から近世の包含層および耕作土(灰褐色および黒褐色あるいは黒色シルトもしくは粘土層)、第３層：縄文時代中期～弥生時代中期の遺物包含層(黒色粘土層および褐色粘土層)、第４層：無遺物層(明黄褐色礫層)、である。第４層は縄文時代前期以前に形成された堆積層で、これより以下からは遺構・遺物を確認することができなかった。当遺跡では、この第４層が堆積そして安定化してはじめてヒトの安定的な活動が行われたものと考えられるが、20C区・21区の境付近で本層が馬の背に高くなっており、さらに南側県道に向かって地形が傾斜するに従って、第２層・第３層の堆積および遺構・遺物の存在が確認された。

縄文時代　調査前の調査区は、北東側高位の緩斜面部と南東側低位の平坦部、さらに西側緩傾斜部に分けられ、各部分で確認された主たる時期が異なっていた。縄文時代の遺構は、北東側高位の緩斜面部を中心に第３層が広がっており、竪穴建物跡(4064SI)が検出された。また西側緩傾斜部では土坑２基も見つかった。出土遺物は深鉢細片のみであり、帰属時期は後期と考えられる。

古代・中世　古代～中世前半の遺物は、西側緩傾斜部で見つかった自然流路内(4099NR)からまとまって出土した。出土遺物には、灰釉陶器椀・壺や山茶碗などがある。

戦国期～近世　今回の調査で最もまとまって調査された遺構・遺物は、戦国期～近世にかけてであり、南東側低位の平坦部に集中していた。平坦部では当該時期の土坑・柵列や炉跡の可能性もある集石遺構(4185SX)のほか、南側の斜面下方に向かって炭化物や陶器片を多量に含む整地層が確認されたことから、この平坦面の造成が戦国期に遡るものであることが確認された。設楽町内では、近世後半から近代以降にかけて宅地などの所在していた場所は、戦後から昭和50年代にかけて大きな造成が行われている場合が多い。本調査区では、西地・東地遺跡の調査以来、戦国期に遡る集落跡の一端が確認・調査された極めて貴重な事例となったといえる。出土遺物には天目茶碗・擂鉢・内耳鍋・砥石などがある。　(川添和暁)



調査区全体図（S=1/300）

下延坂遺跡（本発掘調査B）

しものべさか

所在地 北設楽郡設楽町川向字上延坂・下延坂
（北緯35度06分58秒 東経137度34分28秒）

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和3年5月～11月

調査面積 6,800㎡

担当者 樋上 昇・渡邉 峻・河嶋優輝・社本有弥・宮腰健司

調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過 調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査面積は6,800㎡で、調査区の中央を走る町道79号を挟んで東西二つに分け、西側の昨年度調査区より山側を21A区、東側の調査区は更に中央で南北に分け、それぞれ南を21B区、北を21C区とした。

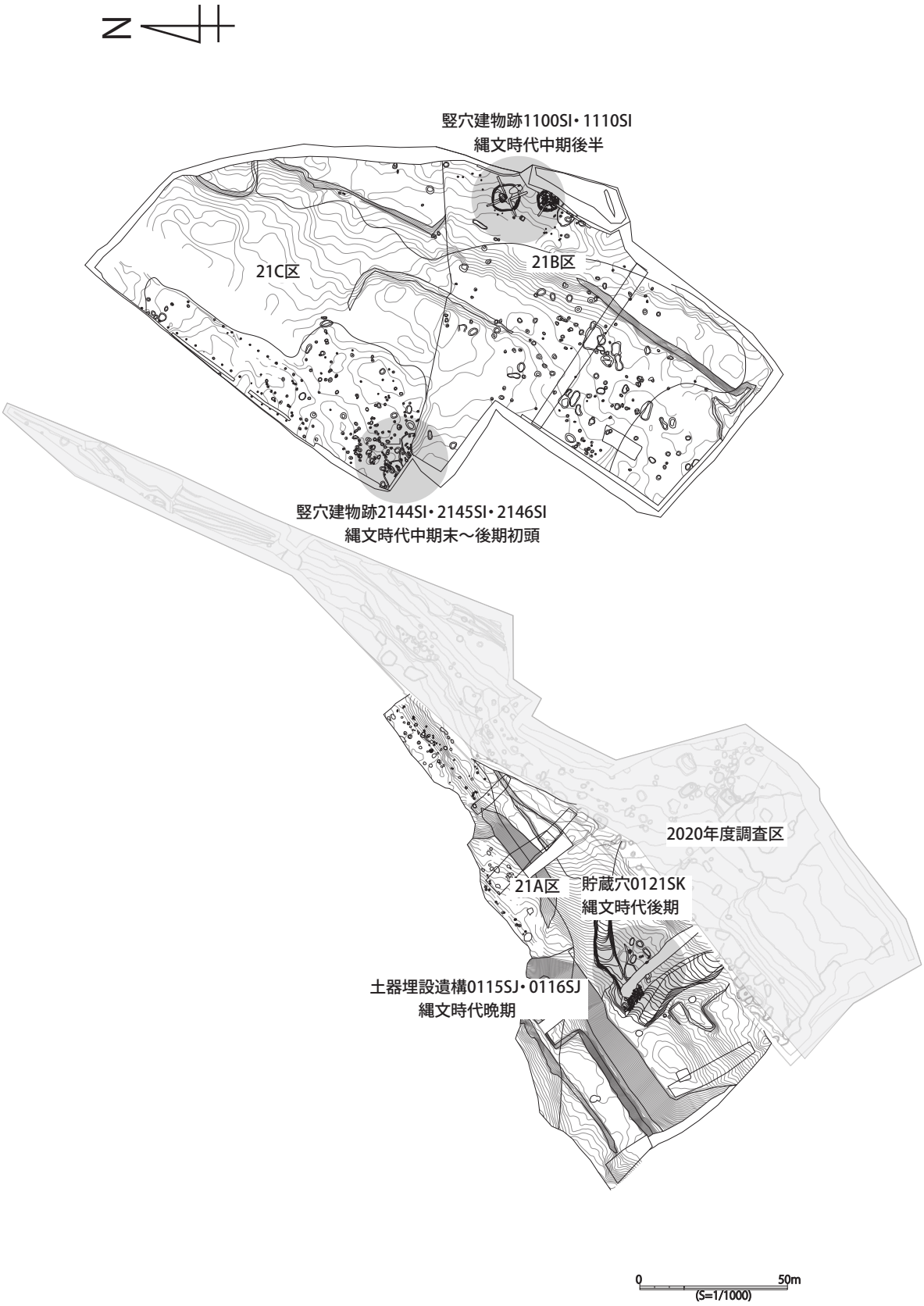
立地と環境 遺跡は境川右岸の河岸段丘から山麓の丘陵斜面に立地する遺跡で、調査区は山の斜面に沿った石垣の残る棚田となっており、一部に植林がされていた。また、21B区と21C区ではかつて養鶏場が存在し、コンクリートによる建物の基礎が一部残存していた。現地表面の標高は、山側の21A区で410～420m、川側の21B･C区で398～401mとなる。

調査の概要 調査は21A区と21B区を並行して行い、最後に21C区の調査を行なった。21A区の北側では、複数の土坑や柱穴列が検出され、南側では大部分が土石流と思われる礫層によって削平されているが、一部で縄文時代後・晩期の土器片や石器を多数含む黒色砂質シルト層の遺物包含層が確認された。この黒色土層の上面からは縄文時代晩期の土器埋設遺構が2基、六文銭を伴う近世の墓跡が3基検出された。また、その下層からは、縄文時代後期の貯蔵穴が１基検出されている。

21B区の西側約3/4の範囲は近現代の削平によって礫を多く含む砂層(基盤層)が露出しており、埋甕1基を除いて建物跡等の痕跡は検出されていない。残る東側約1/4では、南半は近現代の撹乱が大部分を占めるが、北半では基盤層の上に堆積するシルト質の砂層が確認されており、その上面で縄文時代中期後半の竪穴建物跡が２棟検出された。

21C区の東側はかつて存在した養鶏場の基礎工事によって、中央は礫層によって削られ、遺構は検出されなかった。中央の礫層は調査区の東を流れる境川の旧河道と思われる。遺構は調査区の南西側で確認された。南西側では縄文時代中期～後期の土器片や石器が出土し、調査区の南端では竪穴建物跡が３棟、重複して検出された。３棟とも、ピット状の遺構は複数検出されたが、炉跡や柱穴などの付属施設は検出されていない。さらに、それら縄文時代中期～後期の遺構面よりも下層から、縄文時代早期の繊維土器や石器が出土したため、中・後期の遺構面より更に下層の2面目の調査を行なった。その結果、複数のピット状の遺構と北から南へと流れる複数の自然流路と多数の石器が検出された。

２１Ａ区土器埋設遺構 0115SJ 0116SJ 土器埋設遺構0115SJと0116SJは21A区の南側に位置する、縄文時代後・晩期の遺構を含む黒色土層より検出された遺構である。土器は共に縄文時代晩期の土器と推測され、正位に埋設された状態で検出された。0115SJの遺構は直径28㎝で、深さは18㎝、土坑の深さ12㎝の位置に底部が添えられている。土器は底部からおよそ12㎝が残存している。紋様は特に確認されず、土器の厚さはおよそ0.8㎝である。0116SJは0115SJからわずか10



遺構全体図（S=1/1,000）

㎝東で検出され、遺構の直径32㎝で、深さは12㎝、土坑の深さ8㎝の位置に底部が添えられている。土器は底部からおよそ9㎝が残存しており、0115SJの土器より残存状況が良好ではなく、ほとんど底部しか残存していない。紋様は同じく特に確認されず、土器の厚さは底部でおよそ2㎝である。

貯蔵穴 0121SK

0121SKは貯蔵穴と思われる。21A区の黒色土層の下層より検出された遺構である。直径は110㎝で、深さは46㎝で複数の遺物が出土する。埋土の上部で黒曜石の剥片1点、埋土の下部で土器片が上下で２箇所にまとまって出土している。これらの土器片は縄文時代後期初頭のものと思われる。炭化物は確認されなかった。 (渡邉 峻)

21B区 埋甕 1030SK

1030SKは21B区西端部に位置する埋甕である。直径50～60cm、検出面からの深さは15cmで、土坑底面から7cmの高さに正位の土器が添えられている。土器は底部から約8cm程度が残存しており、上部は削平によって欠損したものと思われる。同様に、付近に存在したであろう竪穴建物跡も削平によって滅失したものと想定される。周辺に展開する土坑については、竪穴建物の柱穴であった可能性が考えられるが、柱痕跡は確認できなかった。

竪穴建物跡 1100SI

1110SIは21B区東端部に位置する、集石を伴う隅丸方形の竪穴建物跡である。平面規模は一辺3m65cmで、遺構の南東隅は一段低く削平され滅失している。また、遺構内東寄りには植生痕が複数存在し、建物床面が破壊されている。

主柱穴は確認できないが、建物の北辺および西辺に沿って複数の土坑が検出された。柱痕跡は確認できなかったが、これらが壁柱列を構成した可能性が考えられる。また、これらの土坑には切合関係が認められ、建て替えを行った可能性が想定できる。

建物の中央からやや北寄りに、石囲炉1242SLが存在する。建物床面から土坑を掘り、土坑の壁面に沿って炉石を配置するもので、平面形はやや不整な方形を呈する。埋土には炭化物が少量含まれ、炉石と炉の底面には被熱痕が確認された。

集石遺構は主に建物内の東側に集中し、69個の礫を確認した。周囲の基盤層に同様の礫はほとんど含まれないため、人為的に礫を集めたものと想定できる。石材は安山岩、花崗岩、片麻岩、溶結凝灰岩、砂質凝灰岩であり、片麻岩が全体の3/4を占める。これらは全て遺跡付近で採集できるものである。

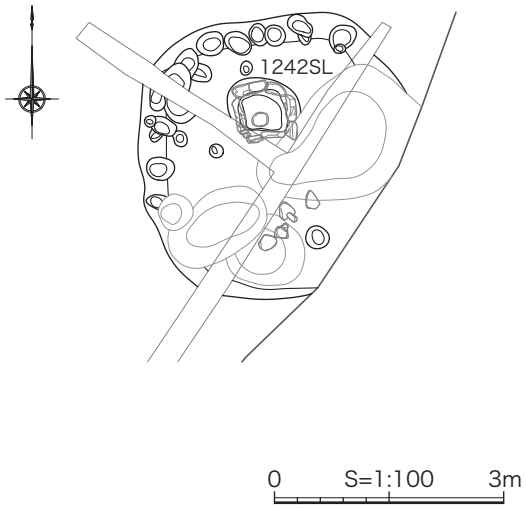
出土遺物は、縄文土器、石器（石鏃・剥片・石核・磨石・敲石・台石）がある。竪穴建物跡の時期は、出土した縄文土器から縄文時代中期後半と推定される。

竪穴建物跡 1110SI

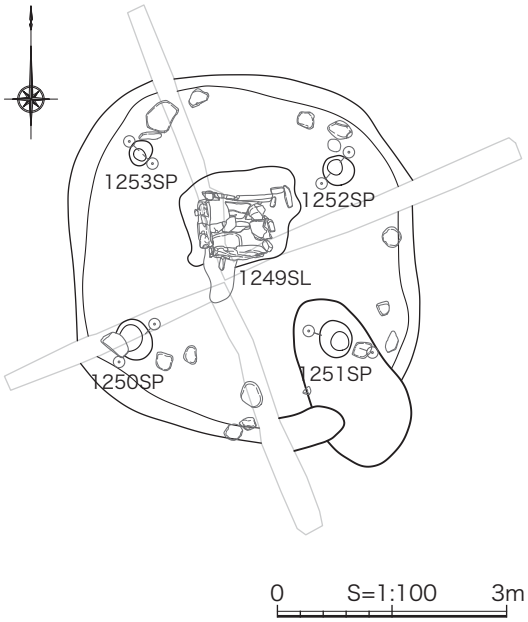
1110SIは1100SIの北約3mに位置する、集石を伴う隅丸長方形の竪穴建物跡である。平面規模は1辺4m55cm～75cmで、南北方向が東西方向に比べて長い。

建物の推定床面では、４箇所に主柱穴を確認した。直径は30～50cmで、建物の推定床面からの深さは40～50cmである。床面から掘り込んだ土坑はこの他には無く、建て替えなどは想定できない。また推定床面では、建物の壁に沿う形で、台石状の礫を複数点、上部に平坦面を向けて配置する様子が見られた。

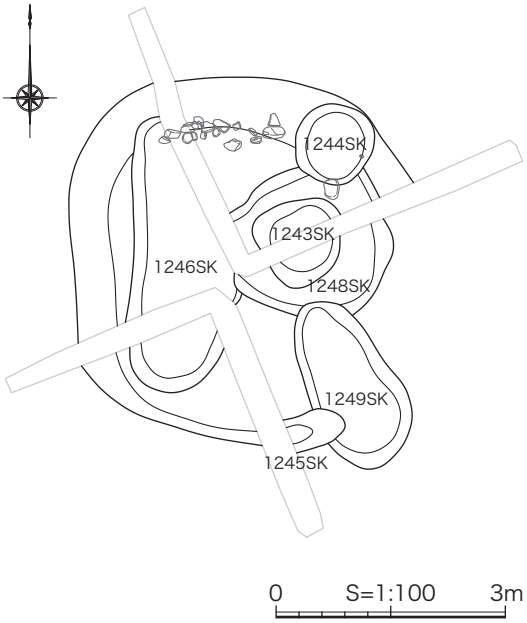
建物の中央からやや北寄りに、石囲炉1249SLが存在する。1242SL同様に平面形は方形であり、炉石には被熱痕が確認される。1249SLでは四辺のうち、東辺と北辺の炉石が割れて炉の内側に転落しており、西辺の炉石も中央で割れている。そのため、建物の廃絶に伴う人為的な破壊行為が行われた可能性が考えられる。また、1249SLでは炉の北東隅に炉石3個をコの字型に並べた様子が確認され、南辺の炉石が確認できないものの、方形の平面



1100SI　推定床面平面図（S=1/100）



1110SI　推定床面平面図（S=1/100）



1110SI　廃絶後土坑群平面図（S=1/100）

1110SI　集石遺構平面図（S=1/100）

竪穴建物跡1100SI・1110SI 遺構平面図(S=1/100)

形態をもつ副炉である可能性がある。

建物の廃絶後、ある程度覆土が流入した段階で、複数の土坑を掘り込んだ様子が確認された。掘り込みは一部の床面を破壊しており、建物南東部では壁面を破壊している。土坑群の埋土には多量の炭化物、焼土および複数の炭化木材が含まれ、炭化木材では長径30cmを超えるものも出土した。土坑の底面や壁面などに被熱痕は確認できず、別の場所で生じた炭化物等を埋めたものと推定される。

集石遺構は土坑群の上層で確認された。礫は建物内のほぼ全体に分布するが、建物北半では南半に対し、礫の径が小さく個数が多いといった違いが存在する。礫の個数は確認できただけで538点を数え、1100SIの集石遺構と同様に人為的なものと推定される。構成石材は1100SIと同様で、片麻岩が半分以上を占める。また、集石遺構を構成する礫には自然礫のほか、石核が複数点含まれる。

出土遺物は、縄文土器、石器(石錐・削器・剥片・石核・切目石錘・磨石・敲石・台石)がある。1110SIでの出土遺物は、建物の廃絶後に掘り込まれた土坑群や、それより上層の集石遺構に伴うものが大半を占め、建物内および掘方の埋土からはごく少数である。このことから、建物の廃絶に伴って土器や石器等を運び出したことが想定される。

竪穴建物跡の時期は、出土した縄文土器から縄文時代中期後半と推定されるが、先述のとおり推定床面付近からの出土遺物が少ないため確実ではない。 (河嶋優輝)

２１Ｃ区 ２１４４ＳＩ ２１４５ＳＩ ２１４６ＳＩ

2144SI・2145SI・2146SIは21C区の南西隅で、黒褐色の縄文時代中・後期の土層より重複して検出された。2144SI・2145SIは調査区の法面になってしまい、2146SIは上層の撹乱が激しく、表土掘削時に誤って削平してしまったため、全体の約半分のみ検出された。2144SI・2146SIは一辺が約４mの隅丸方形で、2144SIは東側の一部が2145SIによって切られている。2145SIは全体のおよそ4分の1のみ検出され、残存形状から円形だと思われる。東側が2146SIに切られている。３棟とも主柱穴や炉跡は検出されていない。2144SIは壁柱穴と思われる建物の壁に沿った複数の土坑は検出されたが、明確な柱痕跡は検出されていない。遺物は2146SIでは複数の縄文時代中・後期の土器片と石器（剥片）が出土したが、他の２棟ではあまり出土していない。

自然流路 ２２６６ＮＲ ２２６７ＮＲ ２２６８ＮＲ

自然流路2266NR・2267NR・2268NRは21C区南西で確認され、縄文時代早期後半の遺物包含層を削り込んで形成されている。流路内は多数の礫と、多くの剥片が出土している。石器の石材は殆どが安山岩である。大きなものでは長さが15㎝近い剥片も出土している。C区北西にはかつて丘陵地があり、そこから小規模の自然流路が複数流れ込んできたと考えられる。

ま と め

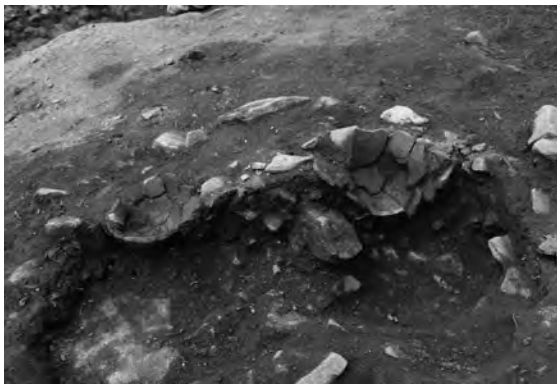
今年度の下延坂遺跡は、土石流や近現代の整地による削平が多いものの、それ以外の残された部分では、多くの遺構が安定して検出されている。今後の調査でも、多くの遺構が安定して検出されると思われる。 (渡邉 峻)

A区 全景

A区 北側柱穴列(東から)

A区 北側石臼出土状況(東から)

A区 南側黒色土検出状況(東から)



A区南側 土器埋設遺構0115(右)・0116SJ(左)(北から)

A区 貯蔵穴0121SK断面(北から)

A区 貯蔵穴0121SK出土遺物(北西から)

A区 近世墓0136SK出土の寛永通宝(東から)

B区 全景(北から)

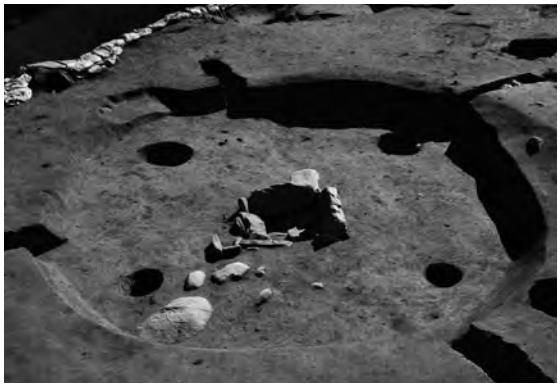
B区 埋甕1033SK出土状況

B区 竪穴建物跡1110SI集石遺構検出状況(南西から)

B区 竪穴建物跡1100SI集石遺構検出状況(西から)

B区 竪穴建物跡1100SI機能面完掘状況(西から)

B区 竪穴建物跡1110SI炭化木材出土状況(南西から)



B区 1110SI掘方・柱穴完掘状況(北から)

B区 1249SL検出状況(東から)

C区 全景(北から)

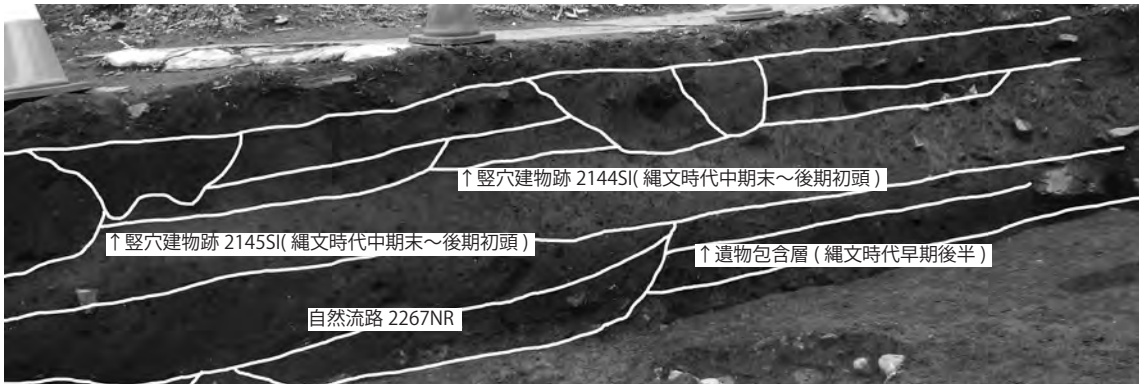
C区 調査区1面目(縄文時代中・後期)完掘状況(南西から)

C区 調査区2面目(縄文時代早期)完掘状況(南西から)

竪穴建物跡2144SI・2145SI・2146SI完掘状況(北東から)

竪穴建物跡2146SI完掘(北から)

竪穴建物跡2144SI完掘(北から)



C区 南壁土層断面(北東から)

大崎（おおさき）遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「田口」）

所　在　地　北設楽郡設楽町田口字大崎
（北緯35度06分22秒 東経137度33分50秒）

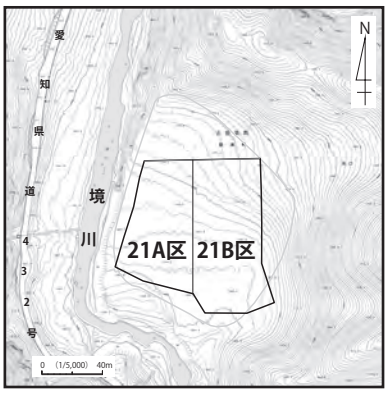
調査理由　設楽ダム

調査期間　令和3年7月～令和4年2月

調査面積　8,100㎡

担　当　者　樋上 昇・川添和暁・渡邉 峻・河嶋優輝・社本有弥・酒井俊彦・宮腰健司

調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査区は、遺跡範囲の中央から南端に向かっての8,100㎡が設定され、便宜的に西側をA区・東側をB区とした。



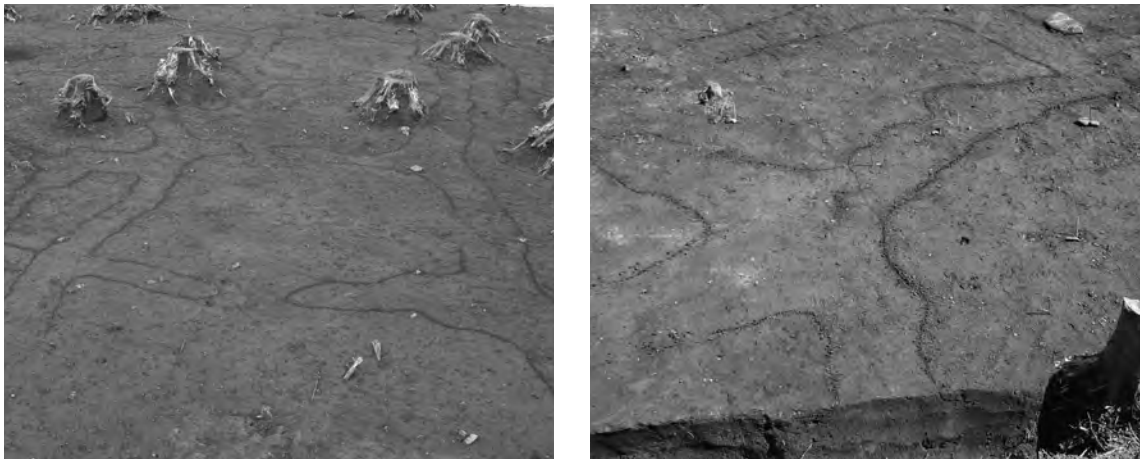
大崎遺跡範囲と調査区位置

立地と環境　遺跡は境川東岸、河岸段丘状の緩斜面地上に立地し、標高365m～377mである。当地は現在の田口集落西にある丘陵尾根が境川に向かって伸びる末端付近に当たり、遺跡の北と東には丘陵尾根が迫っている。北東側はこれら尾根に挟まれた谷地形で、湧水などのためか、調査前までは湿潤な環境となっていた。遺跡範囲内は北東から南西方向への傾斜地で、遺跡中央付近で傾斜の変換点があり、傾斜角度がさらに緩やかとなり南側へと続く。境川は西側からクランクして遺跡の南側を東流し、この付近では、遺跡との比高差が約8mと最も小さい。

調査の概要　層序は、Ⅰ層：表土・腐植土(約10cm)、Ⅱ層：灰黄褐色粘土層など(20～40cmほど)、Ⅲ層：にぶい黄褐色粘土・シルト層(20～50cmほど)、Ⅳ：黒色粘土・シルト層(約30cm)、Ⅴ層：明黄褐色粘土・シルト・砂・砂礫層である。Ⅱ層は古い段階の耕作土および遺物包含層、Ⅲ層上面が縄文時代中期以降の遺構検出面である。Ⅴ層が片麻岩由来の岩盤層あるいは旧境川河床由来の堆積層である。Ⅳ層の形成時期は不詳であるが、特に片麻岩由来の風化細礫を包含する層は、よりⅤ層に近いと考えられる。

今年度の調査で確認された遺構・遺物は、以下の通りである。

時代・時期	検出・出土層	遺構(基数)	遺物
近世以降	Ⅰ層、Ⅲ層上面	集石遺構(5) 木炭窯(1)	陶器片?
戦国期～近世	Ⅱ層中およびⅢ層上面	ピット列(1)・一部の水田関連遺構	陶器片
中世前半		水田関連遺構【畦畔および導水路、沼地形およびピット列(2)】	山茶碗類【碗・小皿】・伊勢型鍋
古代			灰釉陶器【椀・皿】
弥生時代後期			台付甕片など
縄文時代中期～弥生時代中期	Ⅱ層下およびⅢ層上面	竪穴建物跡(19)・土坑墓(4)・包含層	縄文土器【深鉢・注口土器】、弥生土器【壺・深鉢・甕】、石器【石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・刃器・礫器・剥片石核類・磨製石斧・有溝石錘・磨石敲石類・石皿台石類】、石製品【石棒石刀類・岩偶岩版類】
縄文時代早期以前	Ⅴ層直上	煙道付炉穴(1)・土坑群 (3)	剥片

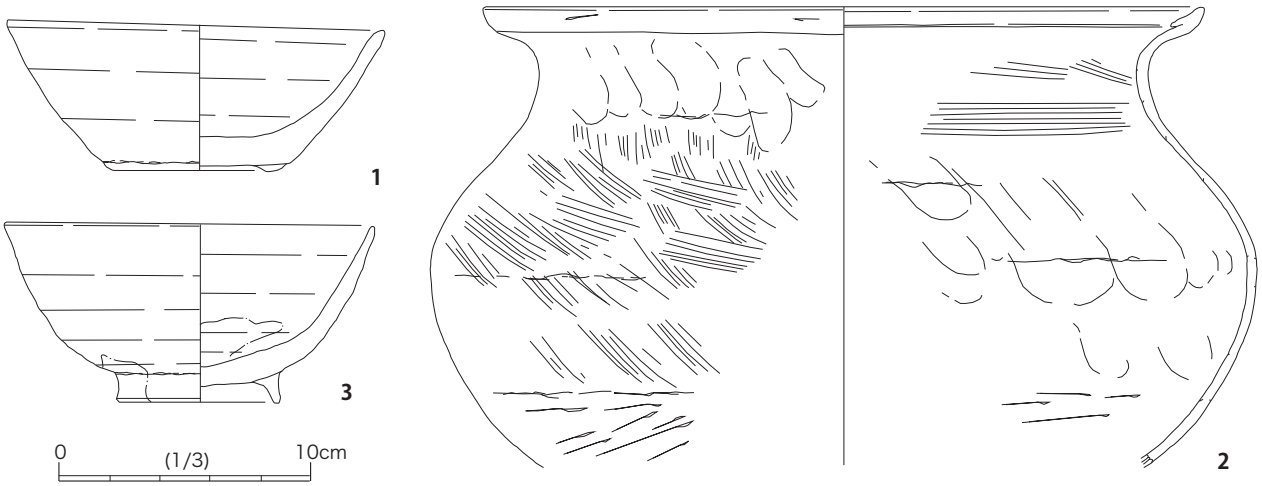


畦畔の検出状況(左：平面、右：平面と断面)

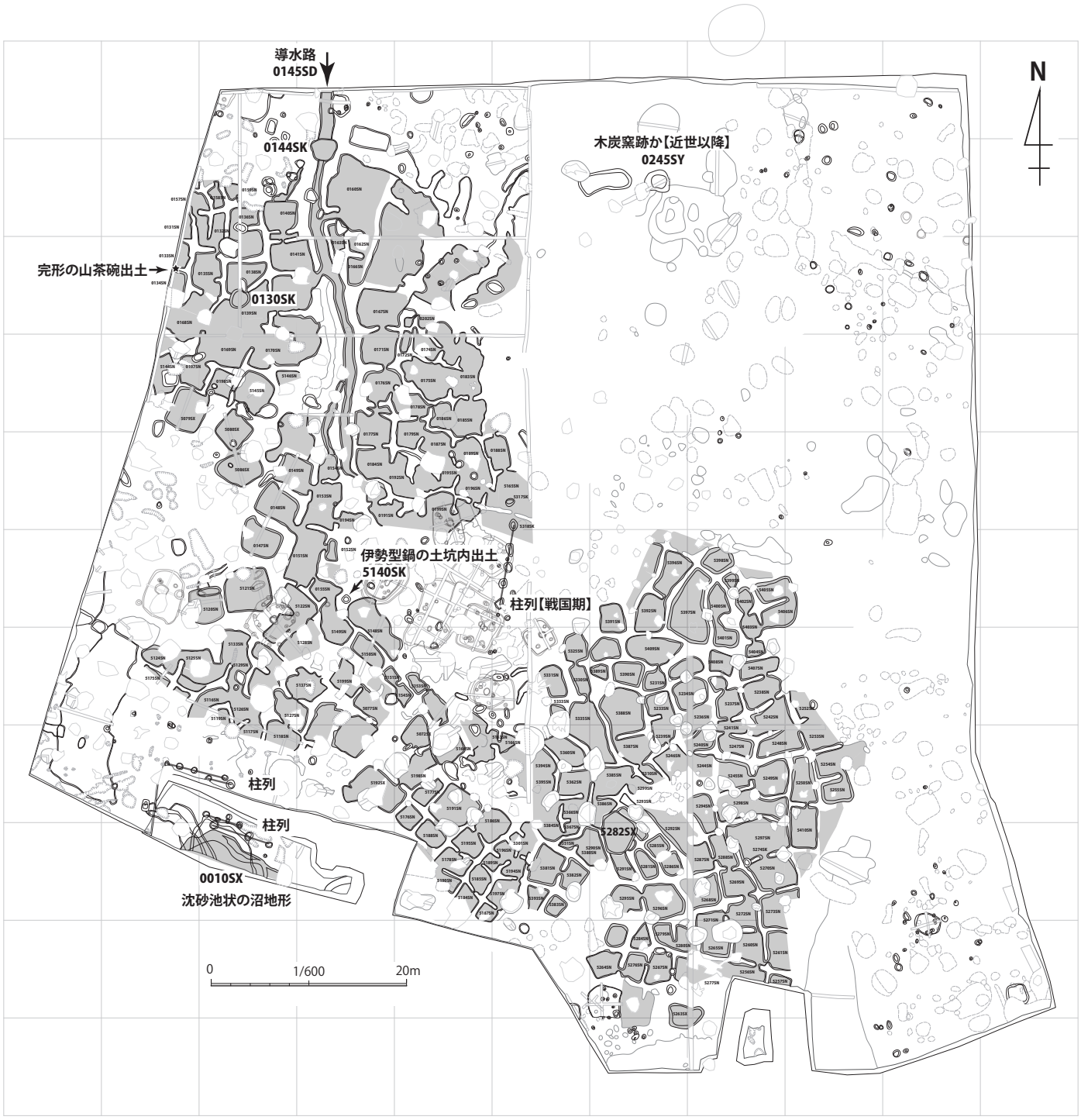
表土掘削を実施したところ、Ⅱ層下層からⅢ層直上に達したところで、安山岩剥片類の出土が、散在的ではあるものの広く確認することができた。さらにⅢ層としているにぶい黄褐色粘土・シルト層は遺跡内全体に安定的な広がりが認められることから、Ⅱ層下層・Ⅲ層直上を目安に調査開始面とした。Ⅱ層は撹拌された堆積層で、部分的に炭化物粒を多く含む。一部Ⅲ層に掘り込まれる形でⅡ層を確認できる部分があり、畦畔の形状を呈していることを確認した（上写真右）。以下、これら遺構を水田関連遺構として概要を述べる。

水田関連遺構

水田関連遺構が検出されたのは、調査区西半分から南側、さらには南東部分にかけてである。水田関連遺構は、Ⅱ層内での包含を主体としており、Ⅲ層直上では概ね擬似畦畔の検出を行うこととなった。水田関連遺構は、アゼおよび溝と、畦畔区画内に形成された作土で構成されている。アゼに囲われた区画は、一辺4mほどを主体とする小区画の形状を呈する。当地は緩やかではあるが地形の傾斜があることから、耕作地を造成するには、等高線に沿った小さい区画を基本とすることが、最も効率的であったと推測される。調査では、導水路と考えられる溝（014SD）が確認されている。この014SDは調査区北側では顕著に確認できるものの、南に進むに従ってこの流路自体を畦畔としての利用がなされていたようである。014SD内には144SKのような大きな落ち込みが見つかっている。中からは片麻岩礫が多く出土していることから、水流を調整する施設であった可能性もある。



水田関連遺構出土遺物(1：山茶碗、2：伊勢型鍋、3：灰釉陶器 椀 S=1/3)



古代以降 遺構全体図 中世前半主体(S=1/600)

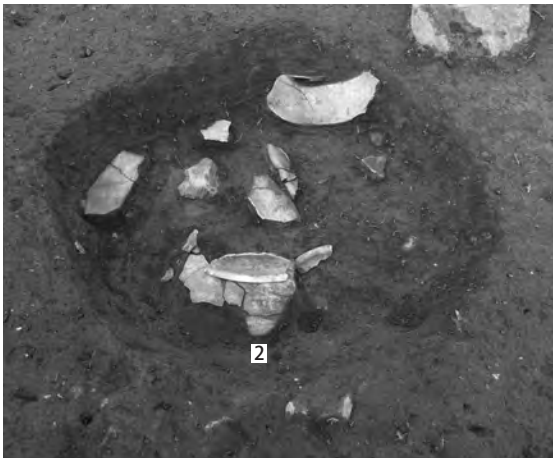
水田関連遺構の時代

水田関連遺構は部分的な補修・改変が継続して行われており、アゼ部分の土層断面を見ると、複数回にわたる造成が確認できる。このようなアゼ内から、山茶碗(37頁図の1)や土坑内(5140SK)に入れられた伊勢型鍋(2)の出土が確認されている。水田関連遺構の時期比定は容易ではないものの、まずはこれらの時代(鎌倉時代)の所産である可能性があろう。B区では、これらの水田と重複する近世の水田跡(5282SX)が存在しているほか、灰釉陶器が多く出土していることから、時代の遡る水田遺構もあるかもしれない。 (川添和暁)

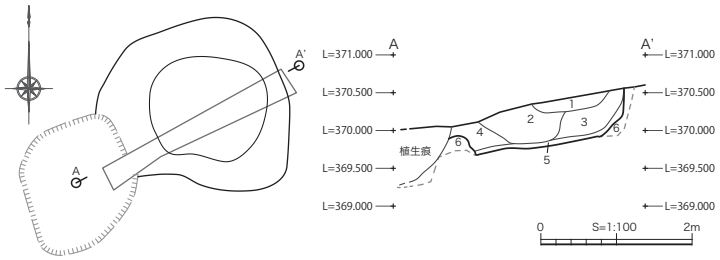
遺跡全景 A区水田関連遺構全体(南西より)

A区 水田関連遺構全景(北より)

畦畔部分出土山茶碗（南東より）

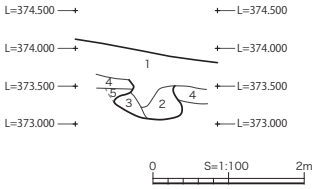


5140SK 伊勢型鍋出土状況（南より）



1 10YR3/2黒褐色シルト層　中礫の亜角礫を少量含む。炭化物を少量含む。
2 10YR3/2黒褐色シルト層　細礫含む。炭化物を非常に多く含む。焼土を極少量含む。
3 10YR3/2黒褐色シルト層　細礫少量含む。炭化物を含む。焼土を極少量含む。
4 10YR2/2黒褐色シルト層　暗褐色シルト小ブロックを含み、細礫少量含む。炭化物を少量含む。
5 10YR3/2黒褐色シルト層　黒色シルト小ブロックを含み、細礫含む。炭化物を多く含む。焼土を少量含む。
6 10YR2/1黒色シルト層

0245SY　平断面図（S=1/100）

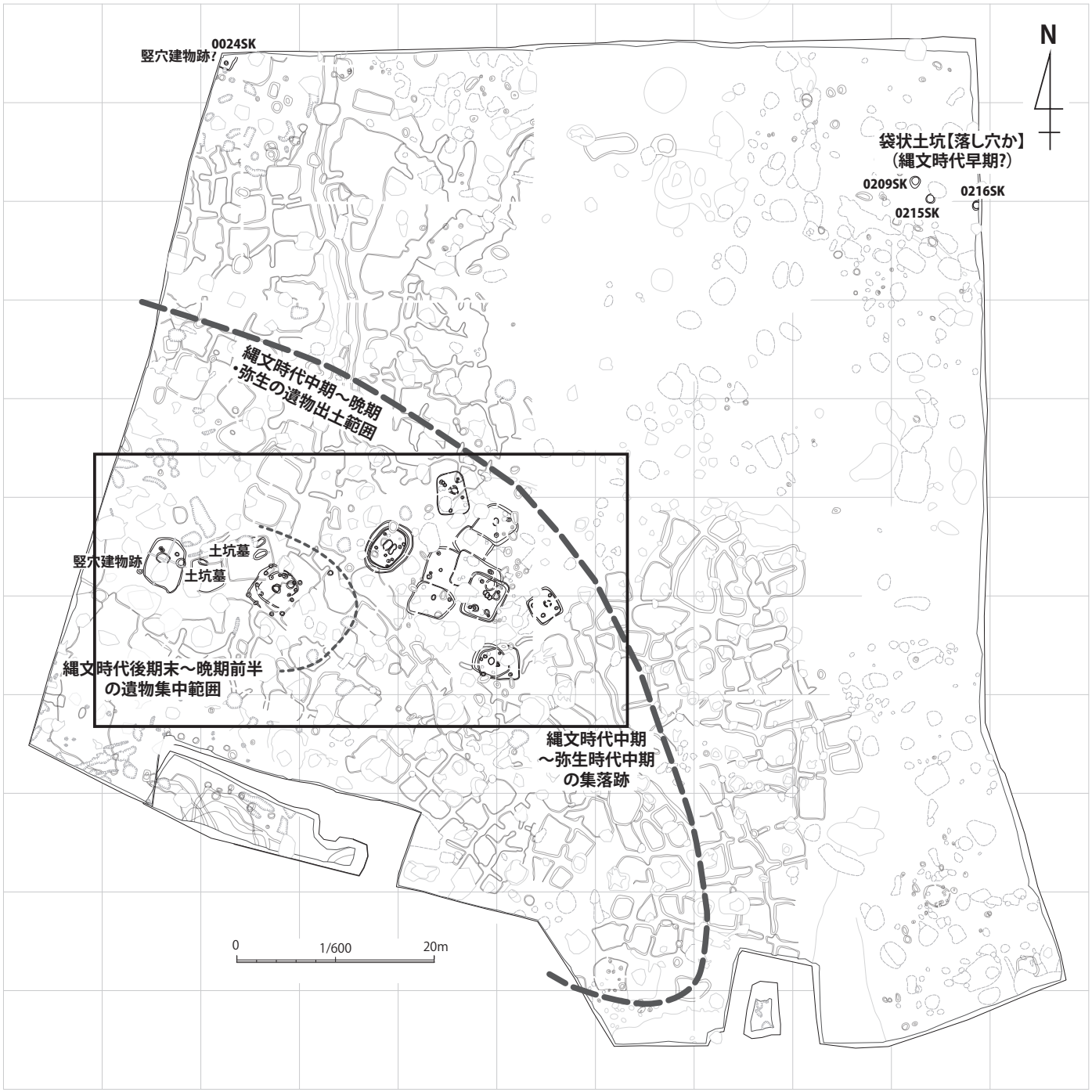


1 10YR2/2黒褐色シルト層　褐色シルト小ブロックを少量含み、細礫含む。
2 10YR2/2黒褐色シルト層　褐色シルト小ブロックを少量含み、細礫多く含む。
3 10YR2/2黒褐色シルト層　褐色シルトブロックを含み、細礫含み、中礫の亜角礫を含む。
4 10YR4/4褐色シルト層　黒褐色シルト大ブロックを多く含み、中礫の亜角礫を少量含む。
5 10YR4/6褐色細粒砂質シルト層　中礫を少量含む。

0216SK　断面図（S=1/100）

木　炭　窯　0245SYはB区北部の斜面地に位置し、多量の炭化物、焼土を埋土に含み、壁面に若干の被熱痕を持つ大型の土坑である。平面形状は直径約2.0～2.5mの不整な円形で、残存する深さは約60cm、遺構西側は植生痕によって破壊され、遺構上部も削平されている。出土遺物はなく、少数の炭化木材が出土するのみで、木炭窯としての機能が想定される。時期は不明であるが、近世後半以降のものと考えられる。

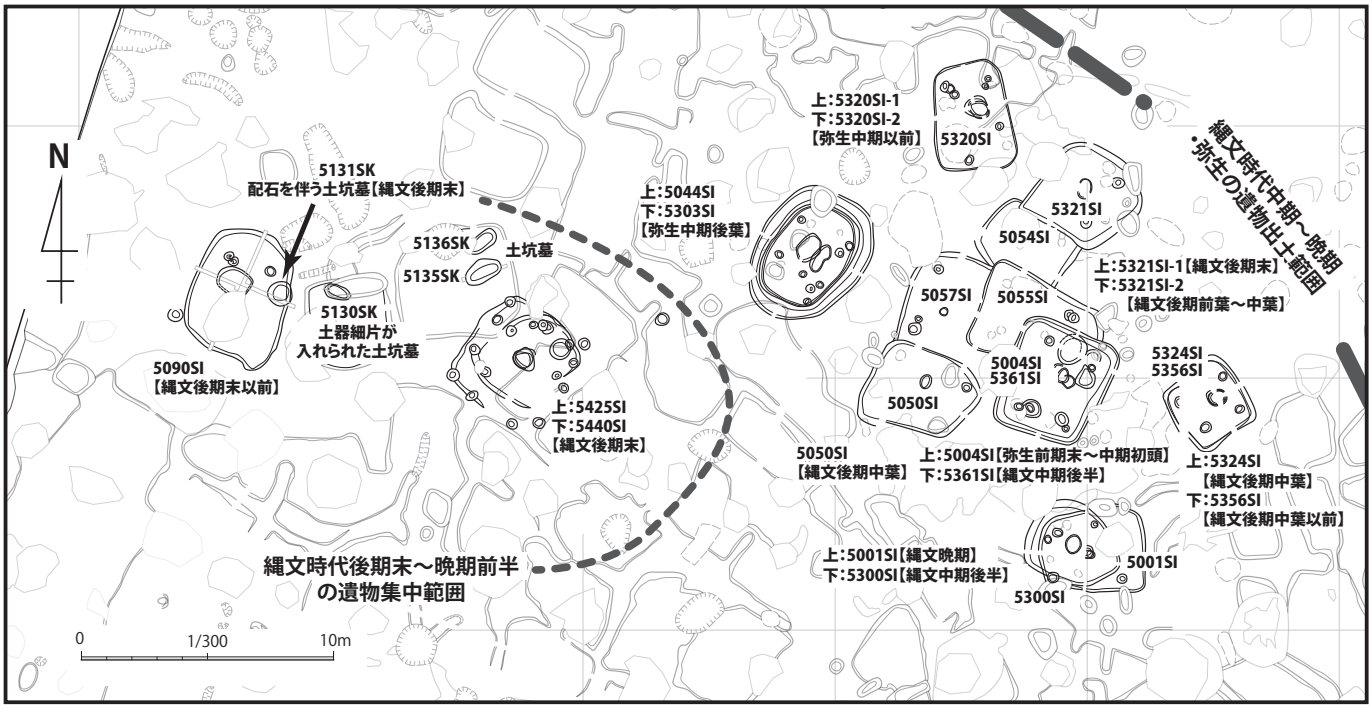
袋 状 土 坑　0209SK、0215SK、0216SKはB区北部の斜面地のうち、やや傾斜の緩い一帯に位置する袋状土坑である。検出面からの深さは0216SKで約50cmであり、形状から落とし穴などの機能が想定される。出土遺物はなく時期は不明であるが、縄文時代のものか。　(河嶋優輝)



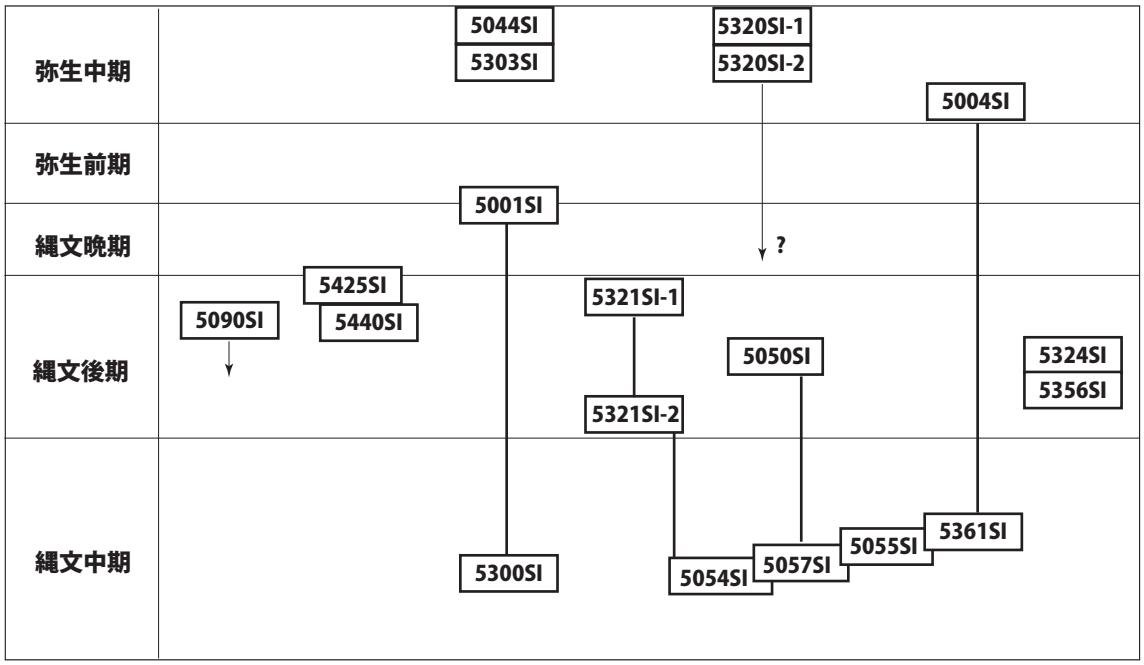
縄文時代・弥生時代 遺構全体図(S=1/600 枠内の拡大図は右頁上に掲載)

縄文時代・弥生時代の集落

調査区全体で、安山岩を主体とする剥片類の出土があるものの、遺跡範囲の南西側では、特に土器・石器が著しく出土した。調査区の中央では、Ⅰ層(表土)を除去すると、Ⅱ層が薄くすぐにⅢ層に達し、竪穴建物跡の集中を確認することができた。出土土器を見ると、縄文時代中期前半以降、弥生時代後期までの遺物が確認されたが、竪穴建物跡の集中地点では、縄文時代中期後半から弥生時代中期までの遺物が出土している。またより西側では、縄文時代後期末～晩期にかけての遺物が集中しており、Ⅱ層下層に当時期の包含層が、耕



竪穴建物跡周辺詳細(S=1/300)



※太線および重なりは重複関係を、矢印は帰属時期が遡る可能性を示す。

竪穴建物跡形成時期および重複関係模式図

作土として撹拌されることなく残存していた。

竪穴建物跡は、同場所の重複も含めて、計19棟を確認した。二つの上図は平面的位置と、形成関係を示したものである。縄文時代中期後半から後期にかけてのものが多い一方で、5004SIのような弥生時代中期初頭、5044SI・5303SIのような弥生時代中期後葉に属する

竪穴建物跡群検出状況 5004SI付近(北から)

竪穴建物跡群完掘状況(北東から)

5425SI(南西から)

5131SK(南から)

ものもあり、長い時代にわたって、居住場所として選地されていた様子を見ることができる。確認できた竪穴建物跡からみて、当時は一時期に1棟あるいは2棟程度の集落であったと推定される。

なかでも最も内容が充実しているのは、縄文時代後期末から晩期であった。竪穴建物跡のほか、埋葬遺構や包含層の形成(送り場・捨て場)の形跡が認められる。この包含層からは、土器片のほか、石棒石刀類や岩偶岩版類の出土も認められた。竪穴建物跡は、5425SIで唯一石囲炉跡を確認し、その他は地床炉跡、あるいは石囲炉の掘り込み土坑が検出されたのみであった。埋葬遺構は4基見つかっている。5131SKは埋土上位などに配石行為が実施された土坑墓で、埋土内から岩偶岩版類片と磨製石斧が出土した。一方、5130SKは土器の大型破片のみならず、細片化した土器片が埋土に多数含まれていた土坑墓である。いずれの遺構からも骨片などの出土は確認できなかった。

出土遺物　出土遺物には、土器・陶器・石器・石製品がある。縄文土器には、深鉢のほか注口土器の出土も確認されている。注口部の出土は目立たなく、壺形を呈する口縁部片や胴部片が多く出土している。弥生土器では、壺・深鉢のほか、台付甕の出土もある。石器には、石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・刃器・礫器・剥片石核類・磨製石斧・有溝石錘・磨石敲石類・石皿台石類がある。特に、調査区全体から出土する安山岩は、境川河床で採取されるもので、これまでの調査でも、打製石斧・刃器・礫器などの大型の打製石器を対象とした石材として集中して使用されたものである。大崎遺跡でも、岩偶岩版類の出土が2点確認された。

5004SI出土土器(弥生時代前期末～中期初頭)

5004SI周辺出土土器(弥生時代中期)

5131SK出土 磨製石斧(縄文時代後期末)

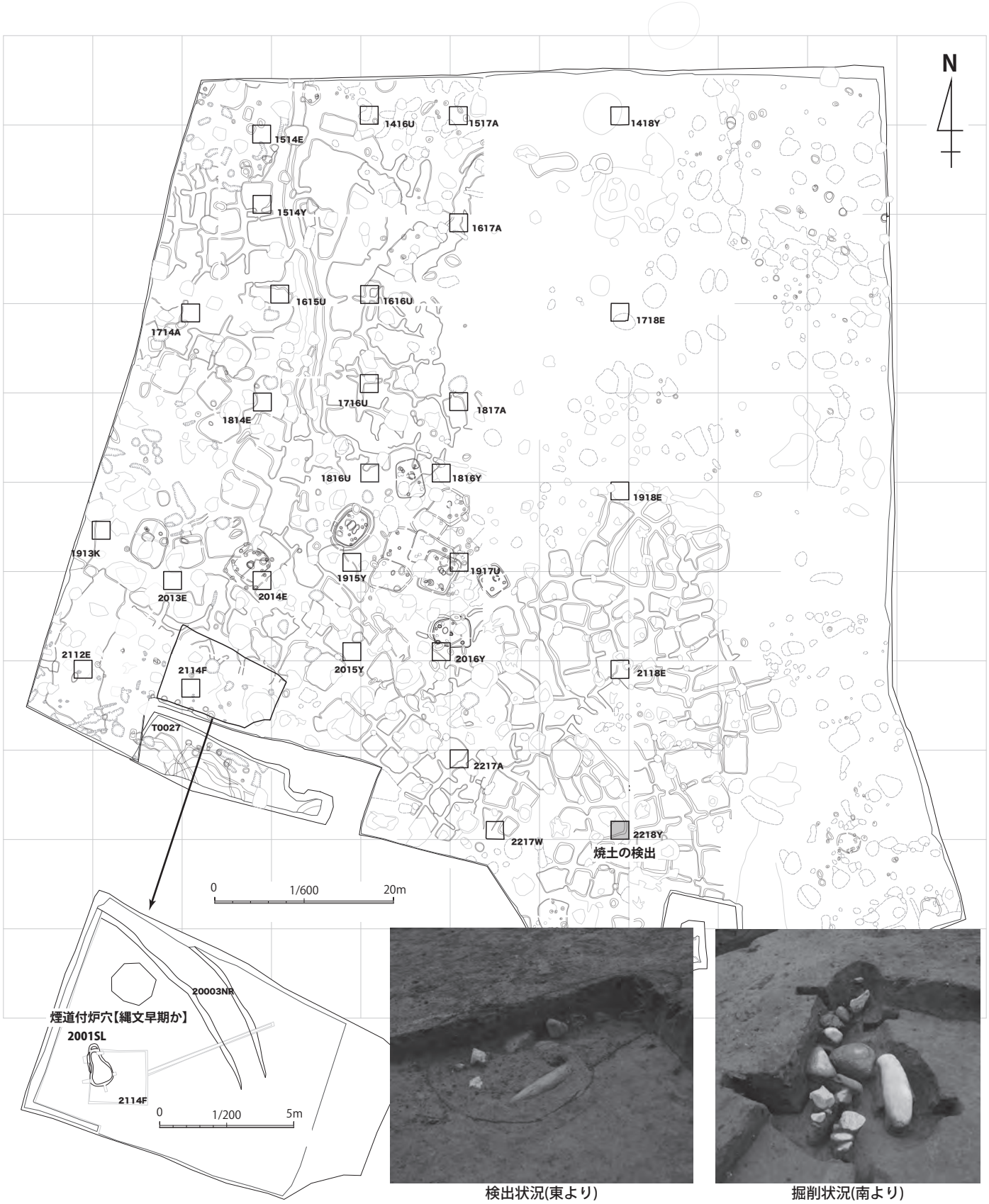
岩偶岩版類(縄文時代後期末～晩期)

2点とも砂岩あるいは凝灰質砂岩製で、破片での出土である。注目すべきはそのうちの1点は5131SKという配石を伴う土坑墓の埋土から出土しており、この岩偶岩版類の性格を考える好資料となろう。

下層確認調査

大崎遺跡の今年度の調査は、Ⅲ層(にぶい黄褐色粘土・シルト層)上面までの調査となった。さらに下層に埋蔵文化財の存在の有無を確認するために、2m四方の国土座標を用いたグリッドを設定して、Ⅲ層の堆積が認められる範囲を掘削した。2118Yグリッドでは焼土を検出したほか、2114Fグリッド付近では煙道付炉跡(2001SL)を、Ⅴ層直上で検出した。2001SLは長軸3m強の平面プラン水滴状を呈する遺構で、もともとは二つの土坑を連結させてトンネル状の炉穴として機能していたものが、その後、礫を入れて改修して使用されたようである。遺構の性格などから縄文時代早期前半に属するものと思われるが、土器の出土は確認できなかった。このように特に遺跡南端では、Ⅲ層下に縄文時代早期以前の埋蔵文化財が包含されている可能性が高いことが推定された。周囲からは、溶結凝灰岩による剥片の出土も散発的に認められることから、今後も注意深い調査が必要とされるところである。

(川添和暁)



検出状況(東より)　　掘削状況(南より)

下層確認グリッド位置と煙道付炉穴(2001SL)

川向向山遺跡（本発掘調査A）
（かわむきむかいやま）

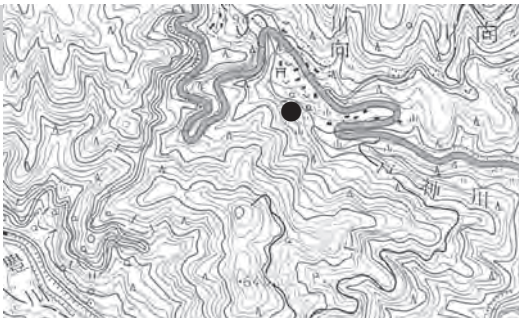
所　在　地　北設楽郡設楽町川向字向山
（北緯35度06分47秒 東経137度33分22秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　令和3年5月

調査面積　20㎡

担　当　者　樋上 昇・社本有弥・宮腰健司



調査地点（1/2.5万「田口」）

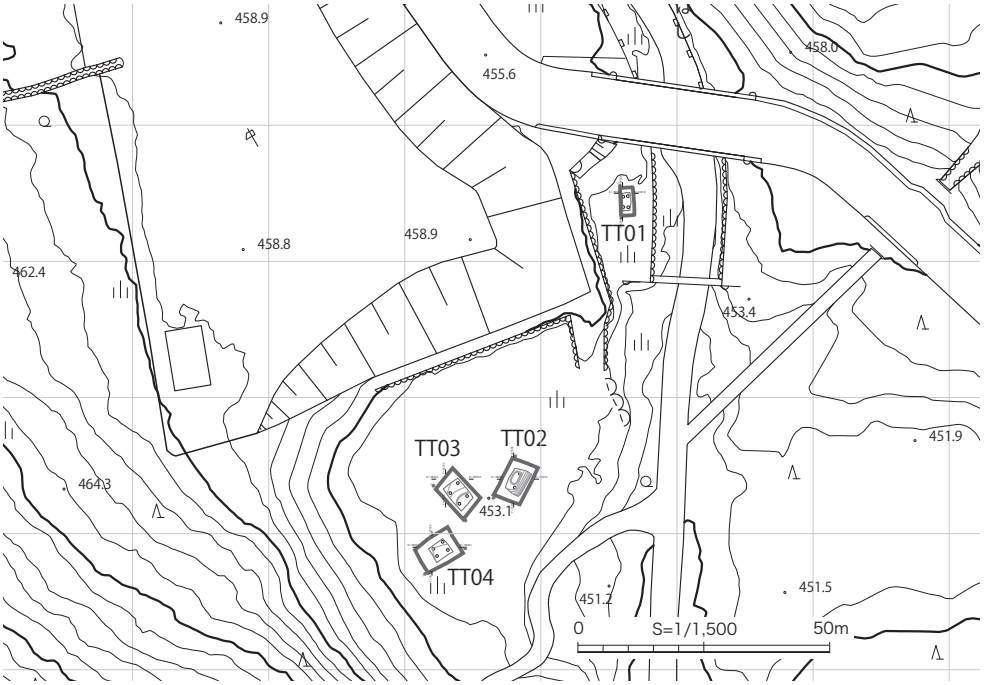
調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。

立地と環境　遺跡は、戸神川右岸の小規模な河岸段丘から山麓の緩斜面地に立地する。遺跡の北東、戸神川を挟んだ場所には上戸神遺跡がある。愛知県教育委員会によって分布調査が行われた際に戦国時代と思われる遺物が確認されている。

調査の概要　今回の調査は橋の脇の平地に１×２ｍのトレンチTT01、その奥の平地に３×２ｍのトレンチTT02～TT04を設定・掘削し、TT03とTT04は基盤層までの深堀りを行った。なおTT01は重機の侵入が困難であったので人力での掘削とした。

調査で観察された層序であるが、TT01は表土下に擁壁を造成した際に搬入されたと思われる礫を多く含む砂質シルトの層が広がっていた。TT02～TT04はにぶい黄褐色粘質シルト層、黄灰色粘質シルト層が共通して見られる。TT03で水田の一部が土層断面で確認できているのみで、包含層は確認できない。TT03とTT04は地表面より２ｍまで深堀りを行い、基盤層である褐灰色粘土層を確認した。

出土遺物は近代のものと思われる磁器片が１点のみTT03で出土している。遺構はTT03の土層断面より、近代に造成されたと思われる水田跡を確認した。　(社本有弥)



トレンチ配置図（S=1/1,500）

引田（ひきた）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　北設楽郡東栄町大字月地内
（北緯35度04分27秒　東経137度39分20秒）

調査理由　道路改良工事（一般国道473号月バイパス）

調査期間　令和4年1月～3月

調査面積　400㎡

担　当　者　樋上 昇・酒井俊彦

調査地点（1/2.5万「三河本郷」）

調査の経過　調査は愛知県建設局道路建設課による一般国道473号月バイパス道路改築工事に伴う事前調査として愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査に先立ち、愛知県埋蔵文化財調査センターが範囲確認調査を行なっている。これに基づき、道路用地調査対象範囲において、河岸段丘中央部にA区、この東側で山地斜面に近い部分にB区の二調査区を設定している。

立地と環境　本遺跡は御殿川の左岸、南向する緩斜面の段丘上に立地する。遺跡の立地する河岸段丘は北側の山地から南に突出し、西辺と南辺を御殿川が巡っている。標高は約420mである。遺跡の存在は戦時中より知られており、1985年に圃場整備に伴う立ち会い調査が行われた。調査は耕作地二十数箇所において実施され、縄文時代後・晩期の遺物を中心に縄文時代前期から弥生時代中期の遺物が出土した。その他古代から中世の遺物が確認されている。

ま　と　め　愛知県埋蔵文化財調査センターによる範囲確認調査ではA区部分から弥生土器が出土し、この時期と考えられる遺構が検出されている。その他縄文時代中期の土器が出土している。圃場整備時の立ち会い調査でも近接する部分より縄文時代から弥生時代の遺物が出土していることから、A区では同時代の遺構・遺物が検出されると考えられる。B区については圃場整備時の立ち会い調査で周辺より縄文時代晩期から弥生時代の遺物が出土していることから、この時期の遺構・遺物が検出されると推測される。（酒井俊彦）

調査前状況(北から)

花の木北遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「新城」）

所在地　豊川市大木町地内
（北緯34度51分34秒　東経137度24分48秒）

調査理由　道路改良工事（一般国道151号一宮BP）

調査期間　令和3年5月～9月

調査面積　2110㎡

担当者　堀木真美子・早野浩二・池本正明

調査の経過　調査は愛知県建設局東三河建設事務所道路建設課による道路改良工事（一般国道151号一宮バイパス）に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。遺跡は、令和元年度の本発掘調査Ａで確認され、新規に登録された弥生時代の遺跡である。

立地と環境　遺跡は本宮山山麓から広がる扇状地の末端、西原台地の縁辺に立地する。付近の標高は約50mである。谷を隔てた台地上には昨年度、愛知県埋蔵文化財センターが本発掘調査Ｂを実施した花の木遺跡・花の木古墳群が立地する。花の木遺跡は弥生時代中期後葉から後期に続く集落で、数棟の大型竪穴建物も確認されている。花の木古墳群は７基の方墳が確認される古墳時代中期前半を中心とする古墳群で、玉類や鉄器類が豊富に出土している。その他、周辺には鑓水Ｂ遺跡、宝陵高校遺跡等、弥生時代の遺跡が数多く分布する。

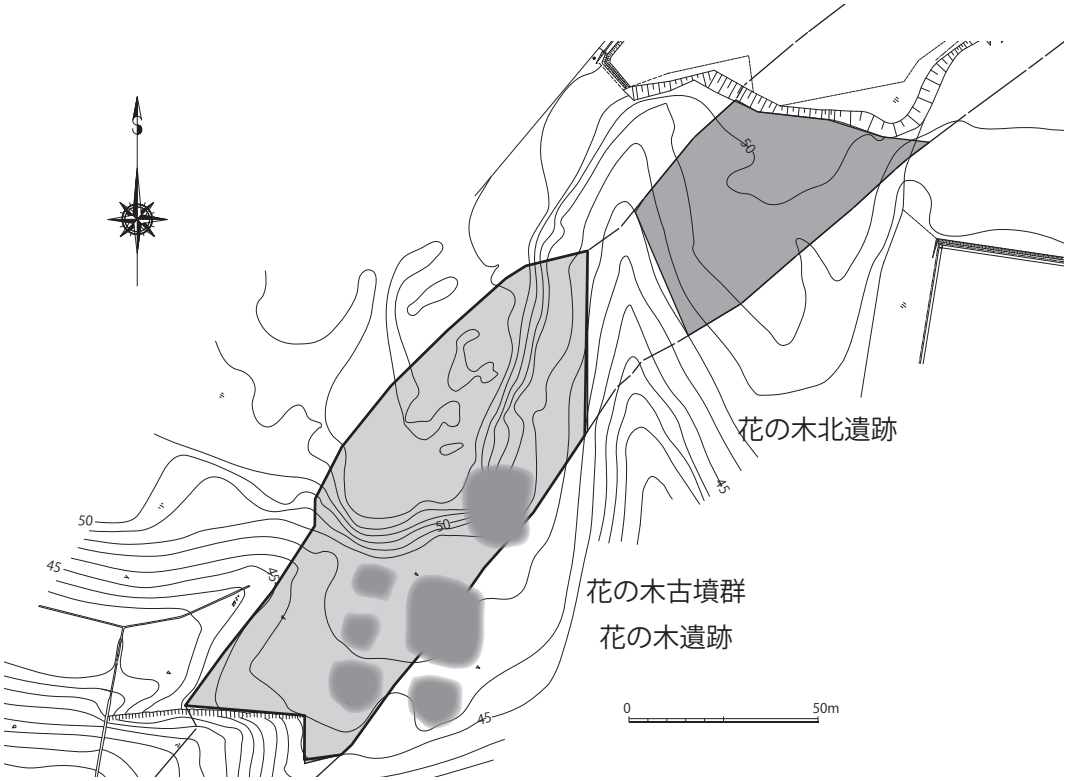
調査の概要　今年度の発掘調査においては、弥生時代中期後葉の竪穴建物３棟と土器棺、古墳時代中期前半の竪穴建物２棟を確認した。これらの遺構は標高50mの等高線付近から上位の平坦面上に分布する。

弥生時代中期　弥生時代中期後葉の竪穴建物はいずれも４m前後の規模で、やや不整な長方形、方形を呈する。011SIは南西隅付近で細頸壷が出土した。020SIは竪穴のほぼ中央に広範囲の焼土面、その周囲に硬化した床面を確認した。021SIは床面付近に炭化材と焼土塊が検出された。

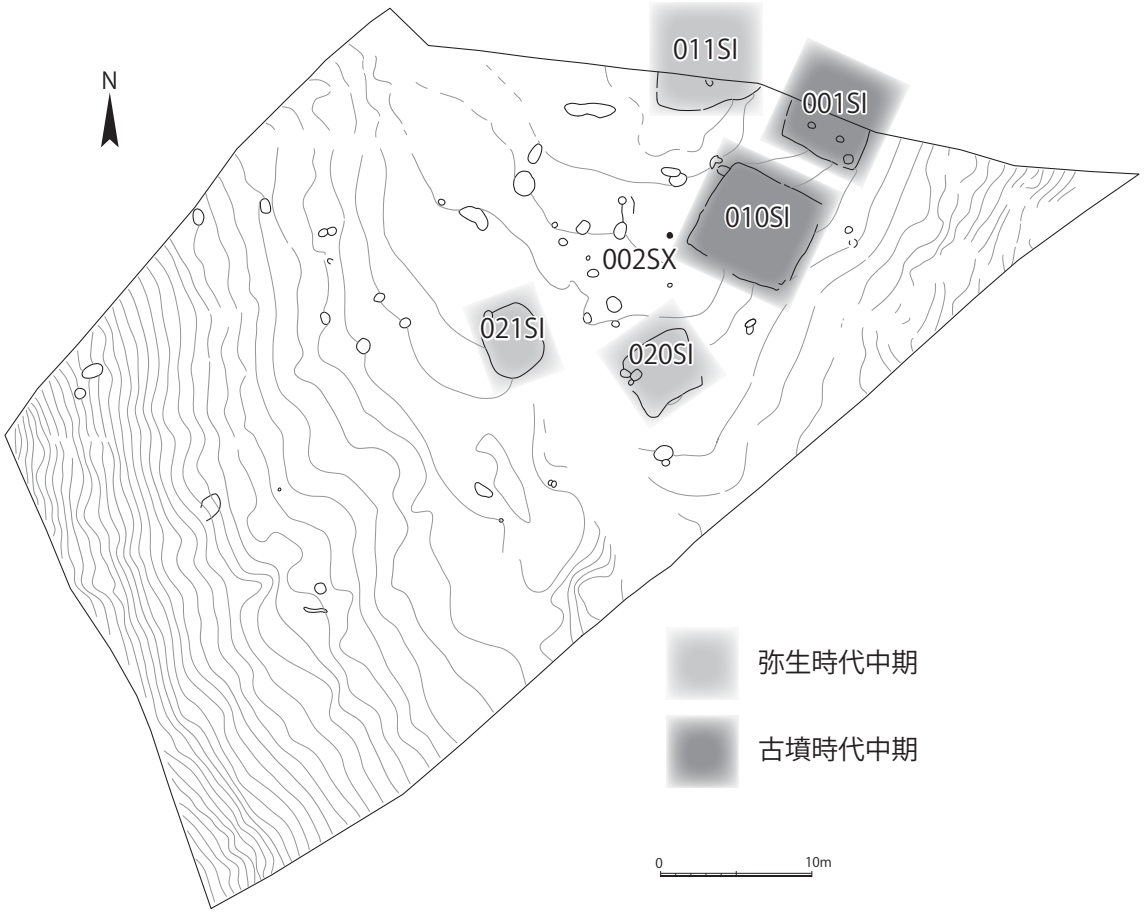
弥生時代中期後葉の土器棺002SXは体部中位を大きく打ち欠いた太頸壷を棺身として横位に埋設し、別個体の壷の体部片を被せて棺蓋としていた。棺身とした太頸壷の口縁部は板状の礫で塞がれていた。

古墳時代中期　古墳時代の竪穴建物は残存状況が特に良好であった。南半部を調査した001SIは一辺約６mの規模で、硬化した床面、主体穴、壁周溝が明瞭に確認された。覆土中からは、土師器高杯、台付甕、鉄製品等の遺物が散在して出土した。ほぼ全形が判明する010SIは一辺約７mの方形で、地床炉、硬化した床面、主体穴、壁溝が明瞭に確認された。遺物は下層から床面付近にかけて、土師器（宇田型甕を含む）台付甕、平底甕、有段口縁壷、鉢、（大型高杯を含む）高杯等が多く出土した。竪穴建物の南東隅には編物錘ともされる細長い自然石が集積されたような状態で出土した。

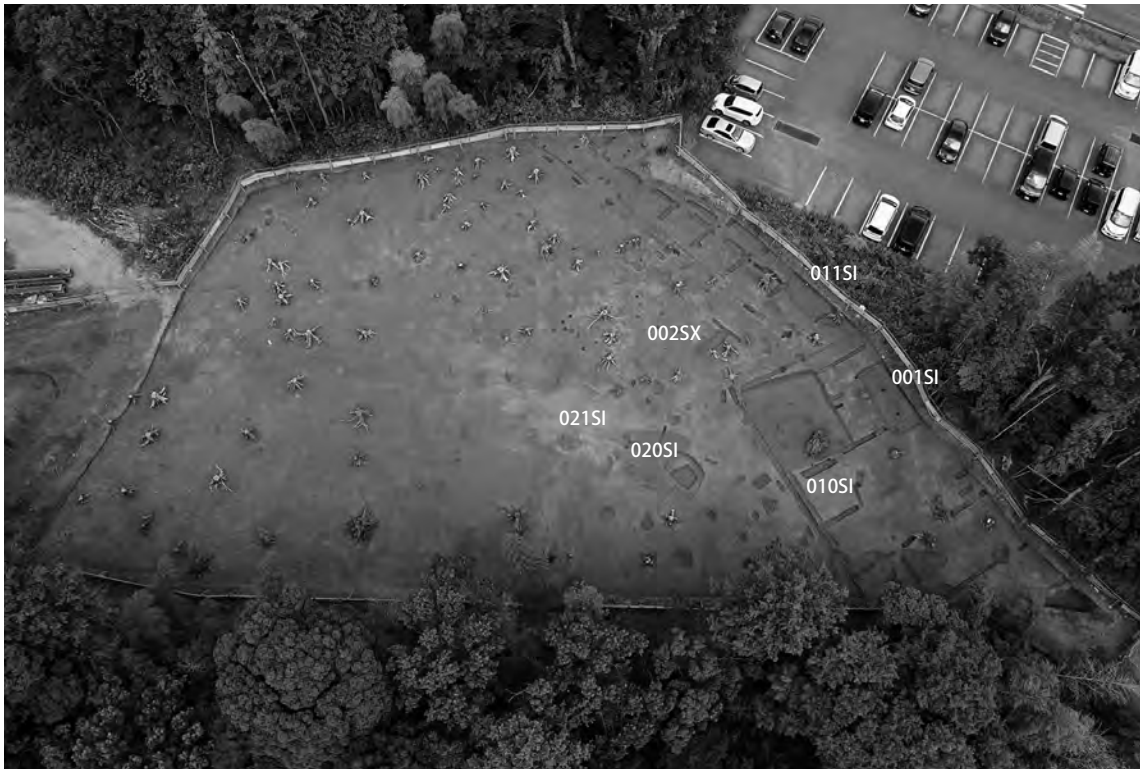
まとめ　弥生時代中期後葉の竪穴建物は花の木遺跡の弥生時代中期後葉から後期の集落に続く集落を構成する遺構群で、同時期の集落の景観や構造、その変遷を明らかにするための好適な事例である。古墳時代中期前半の竪穴建物は花の木古墳群の造営に対応する集落の一つを構成する遺構群と思われる。特に大型竪穴建物を含めて集落と古墳の関係が把握できる事例として重要である。　(早野浩二)



調査区配置図



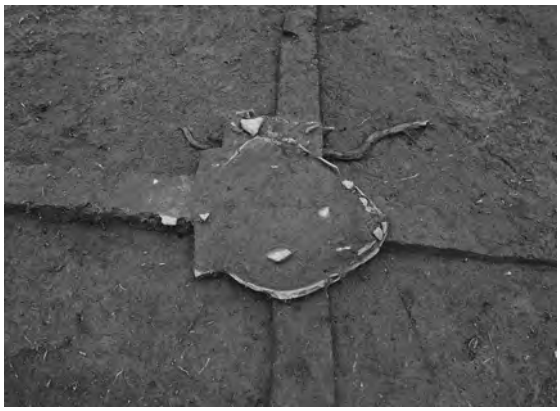
遺構配置図



調査区 全景

竪穴建物011SI 弥生土器出土状況

竪穴建物020SI 床面



土器棺002SX 検出状況

土器棺002SX 調査状況

竪穴建物001SI 検出状況

竪穴建物001SI 土層断面

大型竪穴建物010SI 調査状況

大型竪穴建物010SI 遺物出土状況

大型竪穴建物010SI 遺物出土状況(土師器)

大型竪穴建物010SI 遺物出土状況(自然石)

大型竪穴建物010SI 主柱穴土層断面

大型竪穴建物010SI 完掘状況